再び土製玦状耳飾について

西　川　博　孝

目　　次

1．はじめに……63

2．研究史……63

3．型式学的分類と時空分布……67

4．土製玦状耳飾からみた南関東地方前期後半期の社会（素描）……94

5．結び……97

1．はじめに

千葉県船橋市古和田台遺跡の報告書[1]において、縄紋時代前期に特徴的に発見される土製玦状耳飾について、集成とその結果に対する所見を述べてから、早20年が経過した。当時、学部学生であった筆者のその所論は、はなはだ稚拙で十分意を尽くしたものとは言えなかった。しかし、幸いなことに藤田富士夫氏をはじめとする研究者諸氏から批判を賜ったり、参考文献としてしばしば利用されたことは、望外の喜びであった。

以後、開発に伴う遺跡の調査が急激に増加するのに伴って、土製玦状耳飾の出土例も増え、昔日とは比較にならないほどの数量に達している。また、直接間接的に本例に関連する論考の発表も行われた。そこで、今回再度本例の集成を行い、先学諸氏の論を評価、検討し、改めて考察を加えることとした。その目的は形態論・分布論の再検討にとどまらず、さらに一歩踏み込んで、縄紋時代前期後半の南関東地方を中心とした社会の実態の一半に少しでも迫ることにある。

2．研　究　史

土製玦状耳飾に関するこれまでの研究は、諸先学によってすでに述べられているところであるが、あらためてふりかえることとする。

土製玦状耳飾は、1951年伊勢田進氏によってはじめて紹介された。[2]横浜市南堀貝塚とグミヌキ谷戸貝塚の2例の完形品で、古墳時代の「金環と同様な形態」とし、いずれも諸磯期の貝塚の貝層中・貝層下から出土したことから、「諸磯式文化期の所産のもの」で、「非常にまれなもの」として紹介した。続いて、沢四郎氏は1959年高久丸山遺跡の資料を紹介し、浮島式に伴うものとして位置付けた。[3]

このように1950年代は、土製玦状耳飾の存在と漠然とした分布の認識にとどまっていた。

1960年、西村正衛氏は、利根川下流域の前・中期貝塚の一連の調査の中間成果[4]の中で、この地域で出土する土製玦状耳飾について、「石材の原産地に遠く隔たった地域にあった社会集団の間では、土製品によってその意欲（第2義的精神的欲求）を満たそうとした。」と理解した。この理解の根底には、硬玉製玦状耳飾などの装身具獲得のため、居住地の産物獲得に励む社会的背景があり、それが文化的発展の根源となったとする考えがある。[5・6]すなわち、氏は土製玦状耳飾を石製玦状耳飾の一時的代用品をして位置付けたとみることができよう。

高山純氏は、1965年耳栓の起源を土製玦状耳飾に求める意欲的な発表を行った。[7]その論証にあたり、11遺跡17点の土製玦状耳飾を集成し、すべて諸磯式に属し、栃木・茨城両県を中心に

分布すること、形態はすべて円形であることなどを指摘した。また、初めて形態分類を行い、断面形態の相違によって7型式に分けた。そして、型式学的に石製玦状耳飾の模倣型から次第に土製でなければ加工不可能な周縁や両面のくびれたものに発展し、垂下式からはめ込み式への着装の変化を経て耳栓となったと考えられた。その論拠として、周縁や両面のくびれた土製玦状耳飾と中期耳栓の形態的類似、分布の重複、時間的連続性、赤色顔料が両者に認められる点をあげられた。また、土製玦状耳飾の普及原因について、滑石原産地の長野県に接する山梨県花鳥山にも出土することから、素材入手難による西村氏の説を批判し、製作方法が簡単であること、紋様施紋が容易であること、赤色顔料の塗布が可能であることから、「土製品の方がより好まれ」たとした。

高山論文は、初めての土製玦状耳飾に関する本格的な論文であり、先駆的業績といえる。氏の形態分類とその型式学的変遷観、さらに、石製玦状耳飾模倣説はその後の研究に大きな刺激と影響を与えることとなった。

一方、中村貞史氏は、1968年に多摩ニュータウン出土の4点の断面形態の異なる土製玦状耳飾は、土器型式の面から時間差が認められないとし、小林達雄氏の範型論[8]をも援用して高山氏の形態変遷及び石製玦状耳飾模倣説を批判し、土製も石製も「玦状耳飾という一つの形式のなかにおけるバラエティーとして把握し得る。」[9]とした。

続いて、藤田富士夫氏は1971年上記の高山説を否定して、耳栓の祖型を形態的類似から石製の「体部凹状管玉状品」に求めた。[10]その中で、氏は中部・近畿では有明山社型玦状耳飾と体部凹状管玉状品が、関東では土製玦状耳飾と耳栓が各々の素材的特性によってセット関係を持ち、したがって、土製玦状耳飾の出現した時に共に耳栓が生まれた、とした。そして、両地域の2者の関係は素材の違いにすぎず、土製玦状耳飾は石製の模倣でなく、素材の違いである、とした。

さらに、福島県台の前遺跡例等の上下面平行をなす平盤状の土製玦状耳飾は、氏が設定した前期初頭・中葉に盛行した極楽寺技法による石製と同型とし、「前代の石製玦状耳飾が、諸磯期に至って何らかの要因で素材を土製に置きかえ、関東地方及びその周辺において独自の発展をした。」と見た。また、当時発見されはじめた多摩ニュータウン例を取り上げ、土製玦状耳飾が浮島式土器文化圏のみの産物でないこと、多摩ニュータウン5例の大きさが極似することから、地域集団の（規制の・・筆者補註）強さが認められるが、浮島式土器分布圏にはこうした規格を今のところ見いだせないことを指摘し、一方、関東圏は素材を土製として共通した強い繋りをみせている、と述べた。

1973年、西川は18遺跡43例の土製玦状耳飾を集成し、その結果から土製玦状耳飾は「諸磯b式期及びその併行期前後に発生し、急激に普及するが、十三菩提式期に入ると激減しながらも

中期初頭まで残存する。」として、出現から消滅までのおおよその流れを示した。[1]また、関東における分布について、浮島式文化圏と諸磯式文化圏のうちほぼ多摩川と鶴見川にはさまれた地域に分布し、浮島式文化圏では土製が主体で石製は客体、後者はその逆であると指摘した。分類にあたっては、高山氏の断面形態による分類を踏襲しているが、氏の形態変遷に疑問を呈し、各形態は同時期のバラエティーであるとした。また、土製玦状耳飾は石製より後出であり、中央孔の作出が石製のそれに極似していることから、石製の模倣からはじまったとして高山氏の意見に賛同している。

この筆者の論をおそらくきっかけとして、藤田氏は1975年再度石製模倣説に反論した。[11]すなわち、富山県小竹貝塚の例を提示して土製は関東圏のみの所産ではないこと、土製の形態は石製の形態にそれぞれ対応する一方、分布も石製の各形態の分布と共通することから、個体差として素材の違いが存在するだけで、土製は玦状耳飾という形式の展開によって生じたバラエティーであるとして、中村氏と同じく小林氏の範型論を導入して再度強調された。

このように、1960年代後半から70年代後半にかけては、高山氏と藤田氏の耳栓出現をめぐっての意見の対立と、土製は石製の模倣かバラエティーかといった議論を中心として、土製玦状耳飾の研究はより深化していったが、そこに小林氏の範型論及びこのころからさかんとなってきた行政調査による類例の増加が背景にあることは、この時期の研究の情勢を象徴的に表している。

その後、土製玦状耳飾の類例は蓄積を重ねてゆくが、そうした中で1983年春成秀爾氏が極めて重大な発言をおこなった。[12]氏は、装身具はその着装例から前期まで女性に限られていたものが次第に男性に拡大されること、一部の者だけがかかわるものと成人のほとんど全員がかかわるものがあるとし、抜歯様式内の型式差が出自と関連するのと同様、装身具の有無・型式差も出自と結びついていたと推定した。そして、縄紋前期に始まった定住生活を玦状耳飾の多量製作と関連付けた。すなわち、定住生活による集団領域の固定化・成員構成の固定化によって集団間の緊張関係が成立し、出自意識が発生したと考え、他集団から婚入してくるひとたちに対する出自意識－差別意識の顕現として玦状耳飾をとらえたのである。この論文及び氏の1982年の論文[13]からさらに補足すれば、この時期は選択居住婚の社会で、玦状耳飾は居住集団出身の女性だけが抜歯と同じく婚姻にあたって着装したものであり、財産の相続など諸権利を主張し享受できる有資格者としての表徴であると想定している。

1985年、設楽博己氏によって３度目の集成が行われた。その結果、59遺跡136例を確認し、形態分類と各形態の時空分布を検討した。[14]形態分類では、平面形態によりⅠ～Ⅲ型に分けⅠ型を下堤タイプ、Ⅱ型を復山谷タイプ、Ⅲ型を藤の台タイプと命名し、分類基準を明示するとともに、断面形態を８類に分け、平面形態との対応関係を検討して、各形態の時期別地域別の変

遷を論じた。そして、Ⅰ型は東北、Ⅱ型は東関東、Ⅲ型は西関東のもので、各地域に出土する別系統の形態は相互の地域交流を示すものとした。また、高山氏の土製玦状耳飾の発展系列と耳栓起源説を否定し、藤田・中村説を支持するとともに、各遺跡の出土量が10個に満たないことから、春成氏の「一部の者だけがかかわる装身具」に賛同した。

小野正文氏は1989年山梨県の土製玦状耳飾及び土製耳飾を集成し、各々の形態分類と両者の関係について考察した。[15]ここで氏は土製玦状耳飾の設楽氏のⅡ型・Ⅲ型の分類基準を孔径と切れ目の長さの比較ではなく、中央孔の平面形に対する位置に求め、断面形態を2種増やして10種とし、設楽氏の分類に改善を試みた。そして、同県の土製玦状耳飾が中期前半まで盛行すること、土製耳飾が前期後半から出現することから、両者は別個の系譜をもつが、両者の融合を示す例があるとした。さらに、土製耳飾の多寡及び型式に地域差があることを指摘し、藤田氏[10]と同様に装身具が地域集団を表徴するとともに、装着者の出自を示すものとして春成氏に賛同した。

長くなったが土製玦状耳飾及びこれに関連する論考を取り上げて、研究史をふりかえった。これまでの研究を段階的に区分すれば、おおよそ3期に分かたれよう。Ⅰ期は、1965年以前の伊勢田氏の発見から西村氏の論考までで、土製玦状耳飾のおよその時期と分布の把握がなされ、その意味付けが想定された段階。Ⅱ期は1965年から1982年までで、高山氏による土製玦状耳飾の断面分類を基礎とした石製模倣説及び中期耳栓祖型説と藤田・中村氏による否定論を中心に、時空分布がより明確になり、時期・地域による形態差が気付かれはじめた段階。Ⅲ期は1983年以降で、設楽氏の平面形態を中心に断面形態を組み合わせた分類により、豊富な類例にもとづいて時期・地域による形態差がさらに明確になり、春成氏の影響を受けて本例を含めた装身具の地域分布の分析から、当該期の社会構造論に及ぼうとしている段階。

以上、研究史の評価をふまえて現状での主な問題点を整理すれば、次のようになろう。

①設楽・小野両氏による形態分類に検討の余地はないか

②地域ごとの出現・発展に再考の余地はないか

③形態による分布の偏りがなぜ生ずるのか

④異系統の形態の出土はどのように理解すべきか

⑤石製玦状耳飾との関連をどうみるか

⑥着装者はだれか

⑥については、性・階層・居住集団・地域集団の意味を含むが、この議論の端緒となった春成氏の論理の再検証が不可欠となろう。

3．型式学的分類と時空分布

設楽博己氏の平面形態による分類基準を基本とし、小野正文氏の改善提案を加えて筆者は以下のように分類した。この分類は単に形態上の分類にとどまらず、土器と同様に時空分布を属性として持つ型式学的分類を目指していることを強調しておく。

Ⅰ型（下堤タイプ）　　Ⅳ型（十三菩提タイプ）
Ⅱ型（復山谷タイプ）　　Ⅴ型（日向タイプ）
Ⅲ型（藤の台タイプ）　　Ⅵ型（毛内（もうち）タイプ）

以下、各型の形態的特徴と時期及び空間分布を図表にしたがって検討したい。

なお、今回の集成によって153遺跡818点以上の出土が確認された。集成に当たっては、図を一旦作成後に、桑原護氏の千葉県内の集成[16]に接し、多くの遺漏があることを知った。このため、その後の他県の知見を含めて追加したことから、図の検索がしにくくなっている。御寛恕願いたい。

(1) Ⅰ型（下堤タイプ）

Ⅰ型は設楽氏によって「縦長の形態のもので、脚部が横にはる形態のものも含める。」と規定されたものである。Ⅵ型（毛内タイプ）との区別を明確にするため、頂部両脇が強い丸みを持つことを新たに特徴の一つに加えたい。今回の集成で新たに１例が追加された。前期末から中期初頭に属する秋田県下堤Ｄ遺跡（第１図1）、宮城県長根貝塚例（同図2）と大木9･10式期に属するとされる同県青島貝塚例（同図3）、前期末から中期末の土器が出土した福島県浦尻貝塚例（同図4）、秋田県湯ノ沢Ｂ遺跡例（第11図352）の合計５例である。青島例は出土トレンチの土器から大木8a式段階にさかのぼる可能性があり、浦尻・湯ノ沢Ｂの両例は出土位置が不明で時期を確定できない。また、５例とも細部の点で形態が異なっており、同地方の石製玦状耳飾との照合が必要である。なお、茨城県興津貝塚例（第１図19）は残欠のためⅠ型と断定できない。

(2) Ⅱ型（復山谷タイプ）

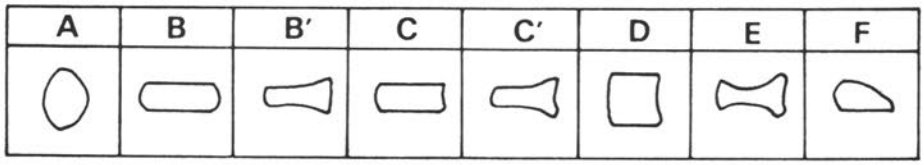
Ⅱ型は同じく設楽氏が「平面形はほぼ円形で、孔径が切目の長さより短い。」と規定された。また、小野氏は中央孔が円の中心より上にあるものと規定している。この型はすでに設楽氏によって東関東を中心に分布することが指適されているので、まず出土量の豊富な千葉県例（第２図～第５図・第10図の大部分等）を見ると、やや横長のもの（第３図66･80、第９図288、第11図344）、頭部が直線的またはつぶれたもの（第２図35･36、第３図65･78、第10図315）、切れ目付近が直線的になるもの（第５図150、第10図315）があるが、ほぼ真円形になるものが大部分

である。中央孔は平面形の中心よりやや上方に穿たれるものが大部分で、中心よりかなり上方にあるもの（第2図30・31・37等）もある。これらは設楽・小野氏の規定に当てはまるが、中心に穿たれるもの（第2図32・47、第4図100・109～111・119、第5図124・125・130・132・140等）も相当あることは注意したい。

断面形態について中央孔の位置の異なる二者を意識しながら検討してみたい。II型の断面形態が多様であることはやはり設楽氏によって指摘されている。このうちB型断面を持つものが最も多いのは明らかであるから、II型の基本形は中央孔が平面形の中心よりやや上方にあり、「断面が表裏とも平坦で周縁は平坦もしくはやや丸味をもつもの」であることがわかる。次にB'・C'類に属するものとして14例がある。（第1図11・12・22・23、第2図32、第3図65・85、第4図90、第5図145、第9図284・288・291・第10図326、第11図331）このうち、中央孔が平面形の中心にあるものは3例（第1図12、第2図32、第9図291）である。また、断面が角型及び臼型をなすものもある。角型は設楽氏分類のD類及びその周縁がくびれないものを含むが、6例確認された。（第1図25、第3図87、第4図100、第5図146、第6図155、第9図287）このうち、中央孔が平面形のやや上方にあるものは2例（第3図87、第5図146）である。臼型は18例あり、中央孔が上方に穿たれるもの7例（第1図24、第3図73・79、第6図156、第10図314・315、第11図329）、中央孔が中心にあるもの11例（第3図70、第4図91、第5図129、第7図219・221、第9図280・295・298、第10図325・328・第11図332）である。以上のように、平面形における中央孔の位置の2形態と各種断面形は相互に関連を持っており、これらの総合がII型の実態であることが理解されよう。なお、中央孔が中心にあって断面がB'・C'類・臼型のものは、IV型との区別が困難である。この点については後述する。

紋様が施されるのは、II型の大きな特徴である。頭部を除く周縁に刻みや円形刺突、これらと縦位・横位の沈線を組み合わせたものや、蛸の吸盤状の粘土粒を貼付したもの（第2図52、第5図149、第10図313）があり、桑原氏は円形刺突を除く有紋の土製玦状耳飾に矢船型の仮称を与えている。[16]周縁施紋は着装時に周縁が第3者に視認できること、そしてその装飾的効果を期待して施されたことを示している。

次に千葉県を除く分布について見ると、栃木県丸山（第1図11）、同県木下（同図12）、同県上欠（第11図353）、同県乙女不動原（同図354）、茨城県金木場（第1図13）、同県森戸（第9図



設楽氏による断面形態分類模式図

280)、同県境松(第1図18)、同県町田(同図22～25)、同県向山(同図28)、東京都小山田№23(第6図178)、多摩ニュータウン№25(同図218)、同№88B(同図219)、同№740(同図221)があり、北は那須地域・茨城県北部まで、西は多摩地区に及んでいることがわかる。なお、設楽氏は多摩ニュータウン№25例をⅠ型としているが、周縁に刻みがあることからⅡ型とみるべきと考える。

Ⅱ型の所属時期については、遺構覆土中出土の確実な例として千葉県毛内003号住居跡から5点(第2図40～42・49ほか1点)が浮島式後半から興津式と、同県和良比遺跡では007住居跡から1点が浮島Ⅱ・Ⅲ式及び諸磯b式中・後葉の土器と、008住居跡から1点が浮島Ⅲ式を主体とした土器と出土している。また、包含層中からの出土で伴出土器からある程度時期が絞り込める例としては、多摩ニュータウン№25(第6図218)、同№88B(同図219)、同№740(同図221)が諸磯c式主体の土器と共伴した例がある。一般に千葉県内の前期後半の住居跡覆土及び包含層は、黒浜式から興津式さらにはその後に続く多縄紋土器や五領ケ台式後半の土器までが連続して出土することが多く、伴出した土製玦状耳飾の時期決定が困難である。しかし、その主体となるのは浮島式から興津式であり、先学が再三指摘するとおりⅡ型がこの時期に盛行したのは確実であろう。中でも上記の共伴例から浮島式後半から盛んになると思われる。初現と終末は先の理由でいまだ明らかでない。

Ⅱ型にはⅢ型との折衷形態がある。毛内例(第2図58)は平面形態はⅢ型で、断面形態はⅢ型にはないB類である。曽谷向台例(第5図138)は平面形態はⅡ型で、断面形態はⅡ型にはないA類であり、多摩ニュータウン№419・420例(第7図223)も同様である。これらは一種のキメラ(chimera)[17]であって、Ⅱ型とⅢ型の同時存在を示すとともに、何らかの交流の結果と考えられる。

Ⅱ型の分布圏内にはⅠ型～Ⅵ型のいずれにも属しがたい例が散見される。茨城県遠原貝塚の3例(第1図14～16)は中央孔が円の中心よりやや上に穿たれⅡ型に近いが、扁平で周縁がさらに薄くなるのが特徴である。他の遺跡に類例がない。茨城県北台(第9図281)、外山(第1図17)、興津貝塚(第1図20)は中央孔が円の中心に大きく穿たれ、断面は凸レンズ状をなす点で共通している。Ⅲ型に似ているが厚くない。今のところ類例は少ないが、後述するⅥ型と同様Ⅱ型の分布圏内における1小型式の可能性がある。茨城県南部に分布するらしい。なお、これに近い形状のものが多摩ニュータウン№5遺跡(第6図169)にある。両者の関連については今後の課題である。埼玉県坂東山例(第6図163)は、藤田氏や小野氏によって耳栓との関連が指摘されている。坂東山は加曽利E式の集落であり、したがってこの玦状耳飾も中期後半と考える向きが多い。しかし、出土位置は不明で、諸磯c式と五領ケ台式が少量ながら検出されている。これに最も近い例が印旛古山にある。(第9図298)厚みがあり、周縁がくびれる点で共通し

ている。ただ、古山例は断面が臼型である点が異なっている。土製玦状耳飾の中期後半の確実な事例の追加はいまだになく、[18]坂東山例は臼型の変異形である可能性をここで指摘しておきたい。

(3) III型（藤の台タイプ）

III型は設楽氏によって「古墳時代の金環状のもの。孔径が切目よりも長い。切目が短く、丸いものが多い。」と規定された。この型はすでに氏によって西関東を中心に分布することが指摘されているから、まず出土例の多い多摩地域のIII型に相当すると思われるもの（第6図164～第7図233の大部分等）を通観すると、平面形はやや横長もの（174）、やや縦長のもの（172・第11図349）があるが、ほぼ真円形であること、中央孔が円の中心にあって全体に環状をなしており、氏の規定はほぼ首肯される。しかし、細かく見ると切れ目の長さと中央孔径の長さがほぼ同じものが多いものの、中央孔径が切れ目の長さに対してきわめて大きいもの（177・184・211・220）があり、また、切れ目が明瞭に表現されるものとそうでないもの、中央孔が縦長になるもの（176・192）もあり、細部の個体による変異が認められる。なお、町田市小山田№15例（第6図181）は、平面形が逆三角形に近く切れ目がやや開く形状を持つ。類似するものに千葉県一本桜例（第4図94）があり、今後の類例の増加に注意したい。

断面形態については、設楽氏は周縁が張り出し表裏に平坦な面を作らないA類と周縁より中央孔が薄くなるB'・E類があるとした。このうち、氏がB'・E類としたもののうち、十三菩提・武居林例については筆者は後述するIV型に分類するため除くとして、残る茨城県町田遺跡（第1図22～27）にはIII型B'類に該当するものがない。また、今回の集成によって新たに得られた多摩地方の類例には、やや扁平なもの（172・225）、角型に近いもの（173・210）がわずかに見出されるにすぎない。したがって、III型はほとんどA類のみの断面をもつといえるが、細部の点ではやはり変異が認められる。すなわち、周縁の丸みが強く中央孔側の丸みが弱いものが主体を占めるものの、周縁が尖り中央孔側が垂直に成形されるもの（164・184等）、円形に近いもの（175・183等）、表裏面の形状が異なるもの（170・176等）もある。こうした断面形の変異は、切れ目の不明瞭性と同じく、III型の中に短い粘土棒をほとんど丸めただけの、整形の粗雑なものが多いことによると考えられる。

次にIII型の分布について見ると、多摩地域が圧倒的にこの型であるほか、茨城県では石岡市外山1例、竜ケ崎市町田1例（第1図26）があり、千葉県では香取郡新山台1例（第9図282）、成田市椎ノ木1例（同図286）、印旛郡谷田木曽地1例（第4図92）、同郡一本桜2例（同図93・94）、四街道市金住院1例（同図99）、同市和良比では確実なもの10例（同図101～105）、千葉市辰ケ台1例、同市エゴタ1例（第10図323）、同市子和清水1例（第11図330）、船橋市古和田台

5例（第5図126～128）、同市西の台1例（同図133）、同市下郷後3例（第11図335・336）、鎌ケ谷市五本松1例、松戸市出来山1例（第11図342）、柏市矢船3例（第5図153）、流山市こうのす台第IV 1例（第11図345）、同市中野久木1例（第5図157）と17遺跡35例程が発見されている。群馬県では利根郡中棚に1例（第6図161）、埼玉県では浦和市和田に1例（第6図162）がある。なお、群馬県清水山例（第6図160）は中央孔が小さく、III型と見るべきではないと考える。次に、神奈川県では横浜市グミヌキ矢戸・宮の原・南堀に各1例出土している。（第8図237・238）山梨県では花鳥山に8例（同図240）、釈迦堂に5例（同図248・249・254）、上の平に1例（同図259）があり、長野県では阿久に1例（同図265）がある。以上のように、III型は多摩地域を中心に、西は山梨から長野にかけて拡がり、東は千葉西部でかなり濃い分布を示しながら茨城南部に及んでいることがわかる。神奈川県方面では出土例は少ないが発見歴が古く、今後の増加が考えられる。多摩地域以北、埼玉から群馬県にかけては、当該期の調査遺跡の多さに比較して報告例がきわめて少なく、II型に限らず土製玦状耳飾自体のまとまった出土は期待できない。

次に、III型の時期について検討する。まず、遺構覆土中における土器との共伴例を多摩地域に求めると、大量の土製玦状耳飾を出土した三矢田遺跡では、J 6号住居跡からIII型2点（第7図215ほか）が諸磯b式中葉を主体とした土器と、J 7号住居跡から2点が諸磯b式中・後葉を主体とした土器と、J 8号住居跡から5点（同図210ほか）が諸磯b式中葉を主体に後葉の土器と、J 11号住居跡及び11号竪穴から各1点が諸磯b式中葉を主体とした土器と、10号竪穴から15点（同図193・196ほか）が諸磯b式中葉から前期末の土器と共に出土している。稲荷丸北遺跡では、2・4号住居址から2点（第6図166ほか）が諸磯a式～b式後葉の土器と、3号住居址から1点（同図165）が諸磯a式～b式中葉の土器と、5号住居址から6点（同図164・167・168ほか）が諸磯b式中葉を主体に後葉の土器と出土している。また、宇津木台C地区では、SI07A・Bから2点（第8図229・231）が諸磯b式中葉を主体に前葉の土器と、SI11から1点（同図230）が諸磯b式中・後葉の土器と、SX18から2点（同図232・233）が同じく諸磯b中・後葉の土器と出土している。他県例では、茨城県外山遺跡62号住居跡から1点が浮島I・II式と、千葉県金住院遺跡では1点（第4図99）が浮島I式～III式と、同県和良比遺跡では007住居跡から2点が浮島II・III式及び諸磯b式中・後葉の土器と、008住居跡から1点が浮島III式を主体とした土器と、また、群馬県中棚遺跡NTJ5号住居跡では、1点（第6図161）が諸磯b式前葉～後葉の土器と出土している。山梨県釈迦堂S－I区SB09からは1点（第8図248）が諸磯a式及びその直前の土器と出土し、同県花鳥山遺跡4号住居址では、1点（同図240）が諸磯b式中葉の土器と出土している。

包含層での共伴事例のうち時期の限定できる例としては、多摩ニュータウンNo.482遺跡で2点（第11図349・350）が諸磯b式前葉主体の土器との、多摩ニュータウンNo.551遺跡では2点（第11

図347・348)が諸磯c式主体の土器との出土事例がある。また、神奈川県宮の原貝塚では1点(第8図238)が第2貝層中から発見され、五領ケ台式期に比定されている。

以上、III型はすでに指摘されているように、諸磯b式期の全般を通じて使用されたと考えられるが、さらに細かくみると中葉から後葉の時期に盛行するものと思われる。初現については、釈迦堂例が最も古く諸磯a式からその直前の時期が与えられるが、この時期以後の遺構も多く、混入の可能性を否定できない。また、そのほか諸磯a式に確実に伴った事例はなく、やはり諸磯b式期にいたって出現するとみるのが今のところ最も妥当であろう。諸磯b式期以降の消長については、多摩ニュータウン№551遺跡・宮の原貝塚の事例から諸磯c式段階及び五領ケ台式段階にも使用されていることがわかり、さらに山梨県上の平遺跡例(第8図259)が小野氏によって前期末から中期に比定されていることから、少量ではあるが中期初頭ころまでは使用されていたと考えられる。

次に、他の形態との関連について触れてみると、前述したII型との形態上の折衷が存在するほか、III型の形態を持ちながら紋様の施されたものが上げられる。高根北(第3図76)、泉北(同図84)、五本松(第5図137)、矢船(同図151・152)、林北(第9図293)といずれも千葉県から出土している。土製玦状耳飾への紋様施紋はやはり前述したようにII型の特徴であって、上記の出土例からも首肯されるが、これらも一種の折衷すなわちキメラとみることができよう。

(4) **IV型**(十三菩提タイプ)

今回新たに分類した形態である。設楽氏分類ではIIB'・IIE・IIIB'・IIIEとして分類されているが、後にみるように一定の形態と時期的まとまりが認められる。IV型が最も早く発見された十三菩提遺跡では「変形というべきもの」として注目しており、筆者もかつて特異な断面を持つものとして、その後の類例の増加に留意していた。1988年鹿島脇の報告において塚本師也氏は、出土した大木6式期の4点のこの型の土製玦状耳飾について福島県薬師堂のものと同型であり、さらに設楽氏が指摘した相模地方十三菩提式期のIIB'・IIIB'・IIIEとも表裏面を凹ませる点で共通することを注意した。[19]筆者がここでIV型として識別した例は次のものである。山形県吹浦6点(第9図273～278)、福島県薬師堂2点(第1図6・7)、栃木県鹿島脇4点(同図8～10)、東京都三矢田8点(第7図212・213)、神奈川県十三菩提3点(第8図234～236)、同県室ノ木1点、同県草山1点(同図239)、山梨県釈迦堂16点(同図242～247・250～253・255)、同県上の平4点(同図258・261・262)、長野県籠畑1点(同図264)、同県梨久保1点(同図266)、同県武居林1点(同図267)、石川県真脇4点(同図269～272)。このように、三矢田・釈迦堂遺跡等の多摩地域・神奈川・山梨を中心として、北は山形北部まで、西は長野から石川まで広い分布を示している。

これらIV型の平面形態は円形で中央孔が円の中心に穿たれるが、平面形に対する中央孔の大きさの比は個体によって異なっている。たとえば、吹浦例(第9図274～277)や籠畑例は、平面形に対して中央孔が小さく、鹿島脇例(第1図8・9)や武居林例は中央孔が大きい。したがって、両者では切れ目と孔径の長さの関係は逆転し、塚本氏がすでに指摘したように少なくともIV型に関しては切れ目と孔径の長さにこだわった分類は有効ではない。また、切れ目は明瞭に作り出されたものが多いが、丸みを帯びたものも稀にある。(第8図252)一方、断面形態はきわめて特徴的で、周縁が最も厚く縁取ったように強調されたものが多い。設楽分類のB'・E類に相当するもの、銀杏の葉状のもの（第1図8・9)、またこれに近いが中央孔側にわずかに厚みを残すもの(第8図236・258・262・271)がある。しかし、周縁の強調度が弱く角型に近いもの(同図244・251・252・255・261)や臼状のもの（同図247・269・272)もある。これらはIV型の変異型と考えられるが、特に後者はII型の一部と識別が困難である。この点については後に触れる。また、山形県大壇B・C遺跡例（第9図279)はII型の平面形を持つが、断面は角型で時期も前期末であることから、IV型の変異型と考えたい。

次に、IV型の時期については遺構内での土器との共伴例として、吹浦でSK1078から5点(第9図273～277)・SK1079から1点(同図278)がそれぞれ前期末から中期初頭の土器と、薬師堂で13号土坑から1点（第1図7)が大木6式と、十三菩提遺跡で3点が墓坑と考えられるP3から十三菩提式1点と、籠畑第10号住居阯では1点が前期末と共に出土している。また、IV型が豊富に出土した釈迦堂では、S－I区SB07から2点(第8図246・247)が諸磯b式と、S－II区SB04から（同図250)が五領ケ台式と、S－III区SB95から1点（同図253)が新道式と共伴しており、三矢田ではJ6号住居址から1点（第7図213)が、III型2点と共に諸磯b式中葉の土器と、J7号住居址から1点（第7図212)が、III型2点と共に諸磯b式中・後葉の土器と出土している。包含層中での共伴で時期の絞り込める例としては、真脇のXI層中で全点が真脇式～朝日下層式と、鹿島脇で3点が大木6式包含層から出土した例がある。以上のように、IV型は前期末から中期初頭にかけて盛行したと考えられ、先に見たIV型の広範な分布はこの時期の各地の土器群の動向と密接に関連していると思われる。中期初頭以降は釈迦堂の新道式との共伴が1例あるにすぎないが、小野氏は釈迦堂のIV型を中期前半に属するものとして積極的に理解している。IV型の初現については明らかでない。釈迦堂や三矢田には諸磯b式との共伴例があるが、釈迦堂S－I区SB07は中期の2軒の住居跡がかぶり、さらに5基の中期土壙によって切られている。三矢田の2事例も前期末から中期初頭の土器が少量ではあるが出土しており、確実性に欠けている。

先に触れたように、II型のうちB'・C'類及び臼型の断面を持ち、かつ中央孔が平面の中心に穿たれるものは、一見IV型との区別がつきがたい。このうち、B'・C'類の断面をもつ第2図32、第

9図291はⅣ型と比べて中央孔がやや小さく、Ⅳ型との識別は微妙ではあるが可能である。一方、臼形の断面をもつ第3図70、第4図91、第5図129、第7図219・221、第9図280・295・298、第10図325・328、第11図332のうち129と298を除き、その他の多くは中央孔が大きい点や厚みの点で特に識別が難しい。これらは諸磯c式期または所属時期不明のもので、あるいはⅣ型、Ⅳ型との折衷型及び初源型である可能性もある。

なお、真脇遺跡4例のうち2例は「下地に黒色塗料を、上塗りは褐色塗料」が塗られているとの記載がある。黒色塗料は生漆、褐色塗料は赤漆の可能性があり、とすれば土製玦状耳飾の数少ない漆塗りの例となる。

(5) V型（日向タイプ）

石製玦状耳飾の特徴的な形態である有明山社型に対応する。[20]片面が平坦で断面が蒲鉾状となるものである。長野県日向遺跡から最初に発見されたことから、日向タイプと命名した。

11遺跡19例のほか1遺跡1例がこの型に入る可能性がある。千葉県の7遺跡15点（第2図54～57・第4図106・第5図122・第9図299・第10図308・321）のほかは、群馬県芳賀東部団地（第6図159）、山梨県花鳥山（第8図241）、長野県日向（同図263）や藤田氏が認定された富山県小竹（同図268）といったように各地に少数発見されている。千葉県東野、毛内、和良比、印旛古山、辺田山谷の例は他の型とともに出土し、浮島から興津式にかけての時期としてよいと考えられる。日向例も諸磯b式期に比定されている。しかし、芳賀東部団地例は諸磯a式を主体に出土するJ22号住居跡から発見されており、この時期とすれば現在知られている最古の事例となる。小竹例も諸磯b式期より古い可能性がある。また、平面形態をさらに細かく見ると、日向・小竹例は中央孔が円の中心にくるのに対し、他の例はいずれも中央孔が円の中心よりやや上方に穿たれている。印旛古山例（第9図299）は上部が直線的で、全体が逆三角形をなし、特徴的である。なお、加曽利貝塚（第10図332）は断面が異形である。V型に近いが周縁は角形をなす、唯一例である。今後の類例に注意したい。

以上のように、V型（日向タイプ）は千葉方面ではⅡ型の多様な断面形態の一部に包括されると考えられ、他のV型は花鳥山と日向が何らかの関連性を持つかもしれないが、全体として一つの型式としてのつながりが見いだせず、したがって型式として成立しない。おそらく、土製のこの形態は各地に流布した有明山社型石製玦状耳飾との関係で理解すべきものと思われる。

(6) Ⅵ型（毛内（もうち）タイプ）

平面形態が長方形となるもので、中央孔は平面の中心より上方にある場合が多い。断面形はやや扁平で設楽氏断面分類のB類に当たり、Ⅱ型の一部に共通する。千葉県毛内遺跡（第2・3図

59～64）に良好な資料が多く出土しており、今回新たに分類した。毛内遺跡のほか茨城県向山（第1図29）、千葉県東野（第2図38）、成田空港№6（第3図68・69）、辺田山谷（第10図312）、高台向（第11図333）、小室上台（第11図334）の7遺跡15点が確認された。いずれも浮島式から興津式にかけての所産と考えられ、向山例は興津式に伴ったとされている。したがって、VI型の分布はII型の分布圏の中に包括され、先述したようにII型が多様な断面形態を持つことからみて、VI型はII型という型式の中の1小型式とすべきであろう。ただし、その分布を細かくみれば中心は北総台地でも東半にある可能性が大きいと思われる。高台向例は側縁にII型と同様の紋様が施されており、II型とVI型の同時併存が証明される。

なお、VI型について設楽氏はI型に含めているが、同形態の石製品は近年関東で発見されており、それらとの関連に注目すべきであろう。

土製玦状耳飾集成表

形態名称　I．下堤タイプ　II．復山谷タイプ　III．藤の台タイプ　IV．十三菩提タイプ　V．日向タイプ　VI．毛内タイプ

№	遺跡名	所在地	点数	形態別点数						備考(時期・有紋・赤彩など)	図番号
				I	II	III	IV	V	VI		
1-1	下堤D	秋田県秋田市四ツ小屋小阿地字下堤	1	1						大木6式期	1
1-2	湯ノ沢B	秋田市四ツ小屋末戸松本	1	1						前期末～中期末	352
2-1	吹浦	山形県飽海郡遊佐町大字吹浦字堂屋	6				6			前期末～中期初　4点赤彩フラスコ状土壙内出土	273～278
2-2	大壇B・C	米沢市大字笹野字大壇四	1							大木6式期　赤彩	279
3-1	長根貝塚	宮城県遠田郡涌谷町小里字長根	1	1						前期末～中期初	2
3-2	青島貝塚	登米郡南方町青島屋敷	1	1						大木9・10式期	3
4-1	浦尻貝塚	福島県相馬郡小高町浦尻南台	1	1						前期末～中期末出土	4
4-2	台の前	相馬郡小高町浦尻	1		1					赤彩	5
4-3	薬師堂	石川郡石川町大字中野字悪戸他	2				2			大木6式期　1点は土壙底面から出土	6・7
5-1	鹿島脇	栃木県那須郡那須町大字寄居	4				4			前期末～中期初	8～10
5-2	丸山	那須郡那須町高久丸山	1		1					前期末　有紋	11
5-3	木下	那須郡那須町大字蓑沢木下	1		1					諸磯式期　赤彩　焼成前小孔有り	12
5-4	夫婦石	那須郡那須町芦野	1？								－
5-5	中山	那須郡烏山町中山	1？							諸磯式期	－
5-6	上欠	宇都宮市上欠町字亀ヶ甲	1				1			赤彩　加曽利E式期の住居跡出土　浮島式少量	353
5-7	乙女不動原亀田	小山市大字乙女	1		1					有紋	354
5-8	後藤	下都賀郡藤岡町都賀	6								－
6-1	金木場	茨城県日立市滑川町金木場	1		1					浮島式期	13
6-2	森戸	那珂郡那珂町額田北郷	1		1						280
6-3	遠原貝塚	勝田市金上字遠原	3							黒浜式～浮島式出土　全体に薄手	14～16
6-4	山崎	那珂湊市部田野山崎	1							浮島式主体	－
6-5	石山神	西茨城郡友部町大字平町字山ノ神	1？							前期後半出土	－
6-6	北台	鹿島郡鹿島町大字木滝字北台	1							浮島式期　土壙墓？から出土	281
6-7	外山	石岡市大字東田中字外山	2			1				浮島式期	17
6-8	境松	つくば市大字境松	1		1					黒浜式～浮島式出土　有紋	18
6-9	興津貝塚	稲敷郡美浦村興津字天神窪	2	1？						V型は浮島III式期　I型？は興津式期	19・20
6-10	貝ヶ窪貝塚	稲敷郡桜川村浮島貝ヶ窪	6							浮島式期　有紋有り	－

形態名称　I．下堤タイプ　II．復山谷タイプ　III．藤の台タイプ　IV．十三菩提タイプ　V．日向タイプ　VI．毛内タイプ

No.	遺跡名	所在地	点数	形態別点数						備考(時期・有紋・赤彩など)	図番号
				I	II	III	IV	V	VI		
6-11	村田貝塚	茨城県稲敷郡江戸崎町村田	1		1					阿玉台式期？　浮島式有り有紋　未製品を模造	21
6-12	町田	竜ケ崎市貝原塚町町田	6		4	1		1？		浮島式期　II型1点は有紋	22～27
6-13	向山	取手市上高井字貝塚	2		1				1	II型は浮島III式期・有紋　VI型は興津式期	28・29
7-1	栗島台	千葉県銚子市南小川町	2？							1点は下小野式～阿玉台式期？	－
7-2	天神後	香取郡小見川町竜谷字桐ケ谷	5		5					黒浜式～中期初出土　II型に有紋1点	30～33
7-3	多田	佐原市大字多田字六ノ台	1							加曽利E式主体　前期少量有紋	34
7-4	東野	佐原市本矢作字東野	6		4			1	1	黒浜式～中期初出土　II型に有紋1点	35～38
7-5	毛内	佐原市返田	50		16	1？		4	8	浮島式～興津式主体　有紋6点	39～64
7-6	新山台	香取郡大栄町臼作字新山台	1			1				黒浜式～興津式出土	282
7-7	成田空港No.6	成田市木の根	5		3				2	関山式～中期初出土　II型に有紋2点	65～69
7-8	成田空港No.7	香取郡芝山町香山新田	2		2					前期後半有り	70
7-9	成田空港No.51	成田市東三里塚	1		1					浮島式～興津式出土	71
7-10	旧久住中南	成田市幡谷字桜谷津	1		1					関山式～興津式出土　有紋	72
7-11	橋賀台	成田市橋賀台	2		2					1点は有紋	73・74
7-12	椎ノ木	成田市芝	4		3	1				黒浜式～中期初出土	283～286
7-13	林北	成田市土室	11		8	1				浮島II式・興津式出土　II型に有紋3点　III型は有紋	287～293
7-14	塚越	印旛郡富里町中沢	1		1					黒浜式～浮島II式出土	294
7-15	七栄古込	印旛郡富里町七栄字古込	1		1					浮島式～中期初出土	295
7-16	伊篠白幡	印旛郡酒々井町伊篠字八木野	3		3					黒浜式～前期末出土	296・297
7-17	古山	印旛郡印旛村大字鎌苅字古山	3		1			2		黒浜式～中期初出土　II型・V型の各1点は赤彩	298・299
7-18	榎峠	印旛郡印西町浦幡新田字榎峠	1		1					浮島式～興津式出土　有紋	75
7-19	高根北	印旛郡印西町小倉字大塚前	4		3	1				浮島式～中期初出土　有紋2点	76～79
7-20	鹿黒	印旛郡印西町草深	1		1					浮島式主体	80
7-21	泉北側第二	印旛郡印西町鹿黒	6		4	1	1？			関山式～中期初出土　II型に有紋1点　III型は有紋	81～85
7-22	復山谷	印旛郡白井町復字山谷	6		6					黒浜式～前期末出土　有紋1点	86～91
7-23	谷田木曽地	印旛郡白井町谷田字木曽地	1			1				花積下層式出土	92
7-24	一本桜	印旛郡白井町十余一字一本桜	2			2				関山式～中期初出土	93・94
7-25	神々廻宮前B地点	印旛郡白井町神々廻字宮前	1		1					浮島式・諸磯c式出土	95
7-26	向台II	印旛郡白井町平塚向台	1		1					浮島II式～興津式主体　有紋	300
7-27	向原	佐倉市神戸字向原	1		1					黒浜式～中期初出土	－
7-28	明代台	佐倉市岩富字明代台	1		1					諸磯a式～中期初出土	301
7-29	木戸場	佐倉市岩富字木戸場	3		2					黒浜式～前期末出土	302・303
7-30	軽沢	四街道市吉岡	4		3					関山式～前期末出土　有紋1点	96～98
7-31	金住院	四街道市吉岡	2		1	1				III型は浮島式期	99・100
7-32	和良比	四街道市和良比字本山他	56		30	10		5		浮島式～中期初出土　有紋21点　赤彩？1点	101～120
7-33	池花	四街道市内黒田字池花	1		1					浮島式・前期末出土	304
7-34	東原No.1	四街道市和良比字東原	1		1						305
7-35	北旭台	市原市磯ケ谷字北旭台	1		1					黒浜式～興津式出土	306
7-36	西萩原	袖ケ浦市上泉字西萩原	1		1					黒浜式～十三菩提式出土	307
7-37	辺田山谷	千葉市緑区辺田町・誉田町	5		3			1	1	浮島式～前期末出土　II型の1点は有紋	308～312
7-38	辰ケ台	千葉市緑区小食土町	1			1				前期末～中期初出土	－
7-39	鎌取	千葉市緑区鎌取町	1		1					黒浜式～前期末出土	121
7-40	星久喜	千葉市中央区星久喜町	1		1					黒浜式～前期末出土　有紋	313

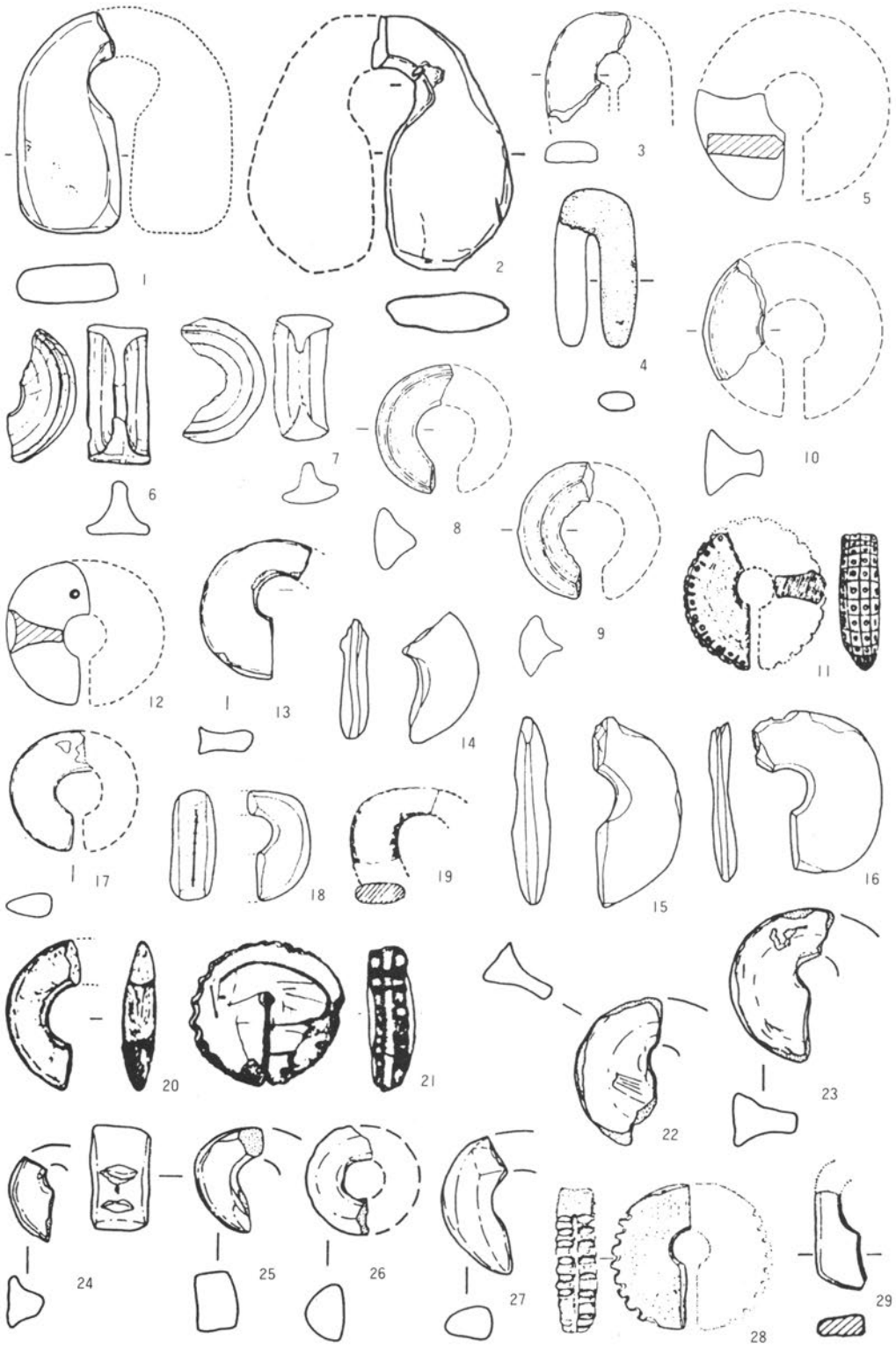
形態名称　I．下堤タイプ　II．復山谷タイプ　III．藤の台タイプ　IV．十三菩提タイプ　V．日向タイプ　VI．毛内タイプ

No.	遺跡名	所在地	点数	形態別点数						備考(時期・有紋・赤彩など)	図番号
				I	II	III	IV	V	VI		
7-41	神門	千葉県千葉市中央区南生実町	4		4					2点は諸磯a式～中期初包含層出土　1点は有紋	314～316
7-42	根崎	千葉市若葉区原町	1		1					黒浜式～中期初出土　有紋	317
7-43	古山	千葉市若葉区加曽利町	3		3					2点は興津式主体の住居跡付近から出土　他の1点は有紋	318～320
7-44	加曽利貝塚	千葉市若葉区桜木町	2					1		関山式～浮島式　1点は赤彩	321・322
7-45	エゴタ	千葉市稲毛区小中台町	1			1				関山式～十三菩提式出土	323
7-46	房地	千葉市稲毛区宮野木町	2		2					諸磯a式～前期末出土　1点は有紋	324・325
7-47	五味ノ木	千葉市稲毛区萩台町	3		3					浮島式～前期末出土　2点は有紋	326～328
7-48	谷津台貝塚	千葉市稲毛区小中台町	1					1		関山式主体　黒浜式～興津式出土	122
7-49	子和清水	千葉市花見川区三角町	2		1	1				黒浜式～中期初出土	329・330
7-50	高台向	千葉市花見川区横戸町	3		2				1	黒浜式～中期初出土　1点は赤彩　1点は有紋	331～333
7-51	古和田台	船橋市高根町	9		4	5				浮島III式～興津式期	123～129
7-52	西の台	船橋市二和町	6		4	1				黒浜式～中期初出土　II型に有紋3点	130～134
7-53	飯山満東	船橋市飯山満1丁目	1		1					黒浜式～浮島式出土	135
7-54	小室上台	船橋市小室町	1						1	浮島式出土	334
7-55	下郷後	船橋市藤原1丁目	7		4	3				黒浜式～中期初出土　II型の1点は有紋	335～340
7-56	佐津間山王台	鎌ケ谷市佐津間	1		1					浮島式出土　有紋	136
7-57	五本松	鎌ケ谷市初富字五本松	2			2				黒浜式～前期末出土　有紋1点	137
7-58	曽谷向台	市川市曽谷	9		2						138～140
7-59	曽谷第27地点	市川市曽谷2丁目	1		1						341
7-60	今島田東	市川市柏井町	1		1					黒浜式～前期末出土	141
7-61	稔台	松戸市千駄堀	1		1					有紋	142
7-62	出来山	松戸市千駄堀字出来山	2		1	1				浮島II式～前期末出土　II型は有紋	342・343
7-63	館林	柏市船戸字館林	1		1					浮島式～前期末出土	143
7-64	水砂	柏市大青田字水砂	2		2					黒浜式～中期初出土　II型に有紋1点	144・145
7-65	聖人塚	柏市大青田字聖人塚	1		1					浮島式～興津式主体	146
7-66	中山新田 I	柏市十余二	1							黒浜式主体　諸磯a・b式出土	147
7-67	矢船	柏市船戸字矢船	14		8	5		1		前期後半主体　II型に有紋5点赤彩2点　III型に有紋2点	148～154
7-68	駒込	柏市	1		1						344
7-69	こうのす台第IVB	流山市こうのす台	1			1				黒浜式～中期初出土	345
7-70	小屋明神脇	流山市小屋	1		1					黒浜式～浮島式出土	346
7-71	上貝塚	流山市大字桐ケ谷字東割	2		2					黒浜式～浮島式出土	155・156
7-72	中野久木	流山市中野久木	1			1				黒浜式～中期初出土	157
7-73	下根	東葛飾郡関宿町木間ケ字志部前	1？		1？					黒浜式主体	158
8-1	芳賀東部団地	群馬県前橋市鳥取町他	1					1		諸磯a式主体	159
8-2	清水山	新田郡笠懸町大字鹿字清水	1							黒浜～諸磯b式出土	160
8-3	中棚	利根郡昭和村大字糸井中棚	1			1				諸磯b式期	161
9-1	和田	埼玉県浦和市大字大牧字和田	1			1				黒浜～十三菩提式出土	162
9-2	坂東山	入間市大字谷田字坂東山他	1							加曽利E式期？　前期末～中期初少量有り	163
10-1	稲荷丸北	東京都世田谷区上野毛	9			9				諸磯式期	164～168
10-2	多摩ニュータウンNo 5	稲城市坂浜	1							前期後半	169
10-3	三輪南A－1地点	町田市三輪町	3			2				諸磯a・b式主体	170～172
10-4	金井原第2地点	町田市金井町	2			1				諸磯b式・十三菩提式出土	173

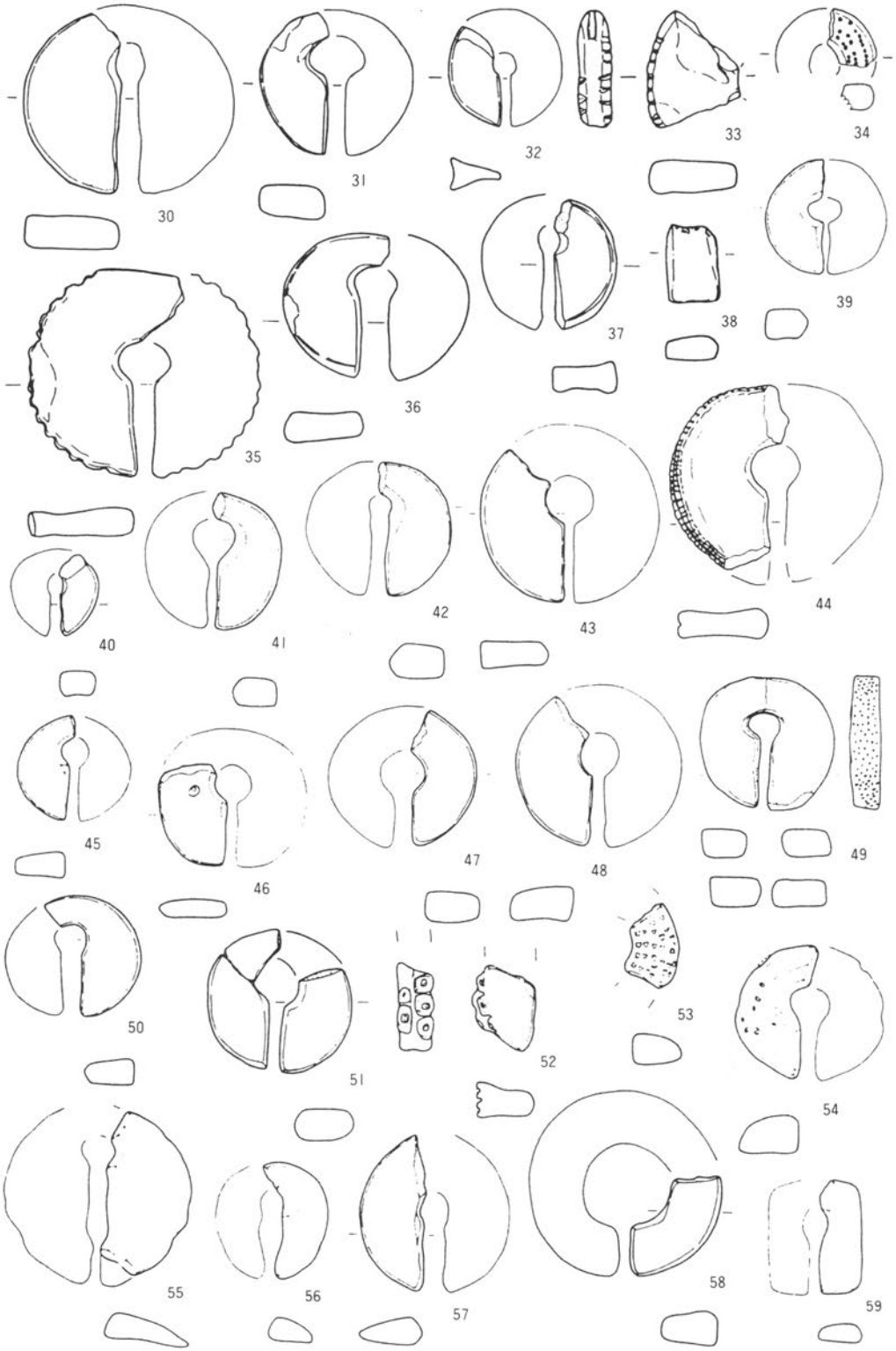
形態名称　I．下堤タイプ　II．復山谷タイプ　III．藤の台タイプ　IV．十三菩提タイプ　V．日向タイプ　VI．毛内タイプ

No.	遺跡名	所在地	点数	形態別点数						備考(時期・有紋・赤彩など)	図番号
				I	II	III	IV	V	VI		
10-5	藤の台	東京都町田市本町田字乙	8			8				前期後半　1点は中期土器に伴出	174～177
10-6	小山田No.23	町田市図師町	3		1	2				諸磯b式主体　II型は有紋	178～180
10-7	小山田No.15	町田市下山田町谷	2			2				諸磯b式主体	181・182
10-8	小山田No.20	町田市図師町	1			1				諸磯a・b式主体	－
10-9	三矢田	町田市真光寺町・広袴町	286			278	8			前期後半～中期出土　赤彩7点	183～215
10-10	多摩ニュータウンNo.120	町田市上山田	1			1				諸磯b式期	217
10-11	多摩ニュータウンNo.121	町田市上山田	1			1				諸磯b式期	216
10-12	多摩ニュータウンNo.25	多摩市落川	1		1					諸磯c式多し　有紋	218
10-13	多摩ニュータウンNo.88B	多摩市唐木田棚原	2		1	1				諸磯b式期	219・220
10-14	多摩ニュータウンNo.740	多摩市落合棚原	11		1	10				諸磯b式期　II型は諸磯c式期	221・222
10-15	多摩ニュータウンNo.419・420	八王子市堀之内	46			6				諸磯式期　赤彩2点	223～227
10-16	多摩ニュータウンNo.174	八王子市上柚木	2		1？	1				諸磯b式主体	228
10-17	多摩ニュータウンNo.753・754		複数							前期	－
10-18	多摩ニュータウンNo.175	八王子市上柚木愛宕	9								－
10-19	多摩ニュータウンNo.31	多摩市貝取	3								－
10-20	多摩ニュータウンNo.551	八王子市南大沢	2			2				諸磯c式主体	347・348
10-21	多摩ニュータウンNo.557	八王子市南大沢	1								－
10-22	多摩ニュータウンNo.482	稲城市坂浜	2			2				諸磯b式（古）主体	349・350
10-23	多摩ニュータウンNo.561	八王子市南大沢	1			1				黒浜式～諸磯c式出土	351
10-24	多摩ニュータウンNo.711	八王子市別所	1			1				諸磯b式主体	－
10-25	宇津木台C地区	八王子市宇津木台	6			6				5点は諸磯b式期	229～233
11-1	十三菩提	神奈川県川崎市宮前区野川	3				3			十三菩提式期　墓壙内一括出土	234～236
11-2	グミヌキ谷戸	横浜市保土ケ谷区上菅田町	1			1				諸磯式期	237
11-3	宮の原貝塚	横浜市港北区新吉田町	1			1				中期初頭	238
11-4	室ノ木	横浜市金沢区六浦町	1				1			十三菩提式前後　一部赤彩	－
11-5	南堀	横浜市港北区南山田町	1			1				諸磯式期	－
11-6	草山	秦野市曽屋字滝ケ瀬	1				1			諸磯b式～中期初出土	239
12-1	花鳥山	山梨県東八代郡八代町竹居字花鳥他	9			8		1		前期後半　赤彩2点	240・241
12-2	釈迦堂	東八代郡一宮町他	21			5	16			諸磯式～中期前半　赤彩7点	242～255
12-3	笠木地蔵	東八代郡一宮町	1							中期？　赤彩	256
12-4	豆塚	東八代郡一宮町	1							諸磯b式～中期初　赤彩	257
12-5	上の平	東八代郡中道町	6			1	4			前期末～中期	258～262
12-6	天神	北巨摩郡大泉村	3							諸磯b式～中期初	－
13-1	日向	長野県諏訪郡富士見町日向	1					1		諸磯b式期　赤彩	263
13-2	籠畑	諏訪郡富士見町境	1				1			前期末	264
13-3	阿久	諏訪郡原村	1			1					265
13-4	梨久保	岡谷市梨久保	1				1			前期末～中期　赤彩	266
13-5	武居林	諏訪郡下諏訪町下原	1				1			諸磯c式～十三菩提式期	267
13-6	涸沢	塩尻市洗馬上組	1							前期後半	－
14-1	小竹貝塚	富山県富山市呉羽町小竹	1					1		前期中葉～後半	268
15-1	真脇	石川県鳳至郡能都町真脇	4				4			前期末　2点は漆塗りか	269～272
合計		153遺跡	818点以上								

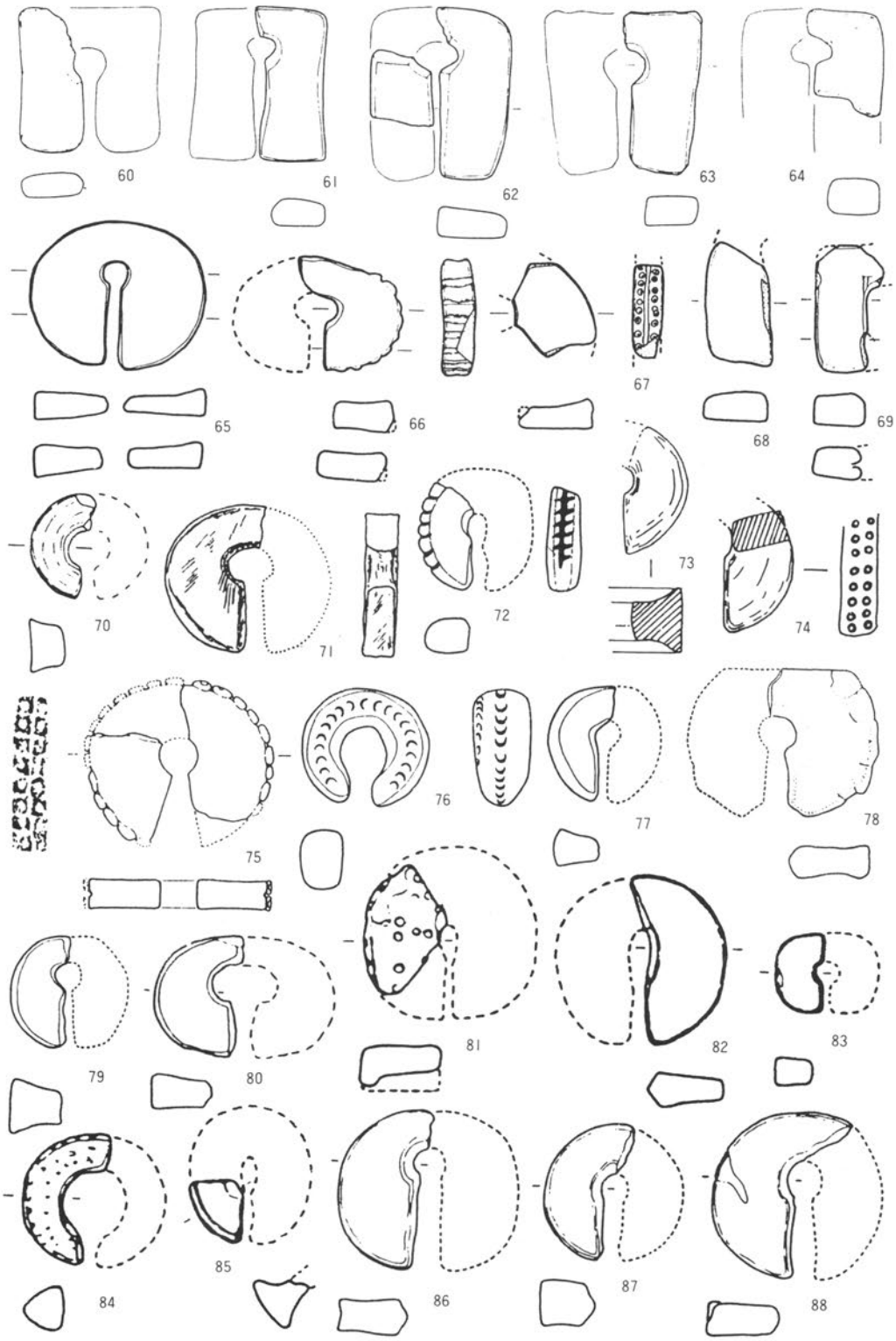
＊年報等出土記載のみのものについては、掲載していない。
＊千葉県飯塚貝塚例は桑原氏は玦状耳飾とするも、報告書では断定していない。また、実測図からは判断できない。
＊茨城県日立市遠下例は桑原氏は土製とするも、報告書に土製の記載なし。



第１図　土製玦状耳飾集成図１（縮尺1/2）

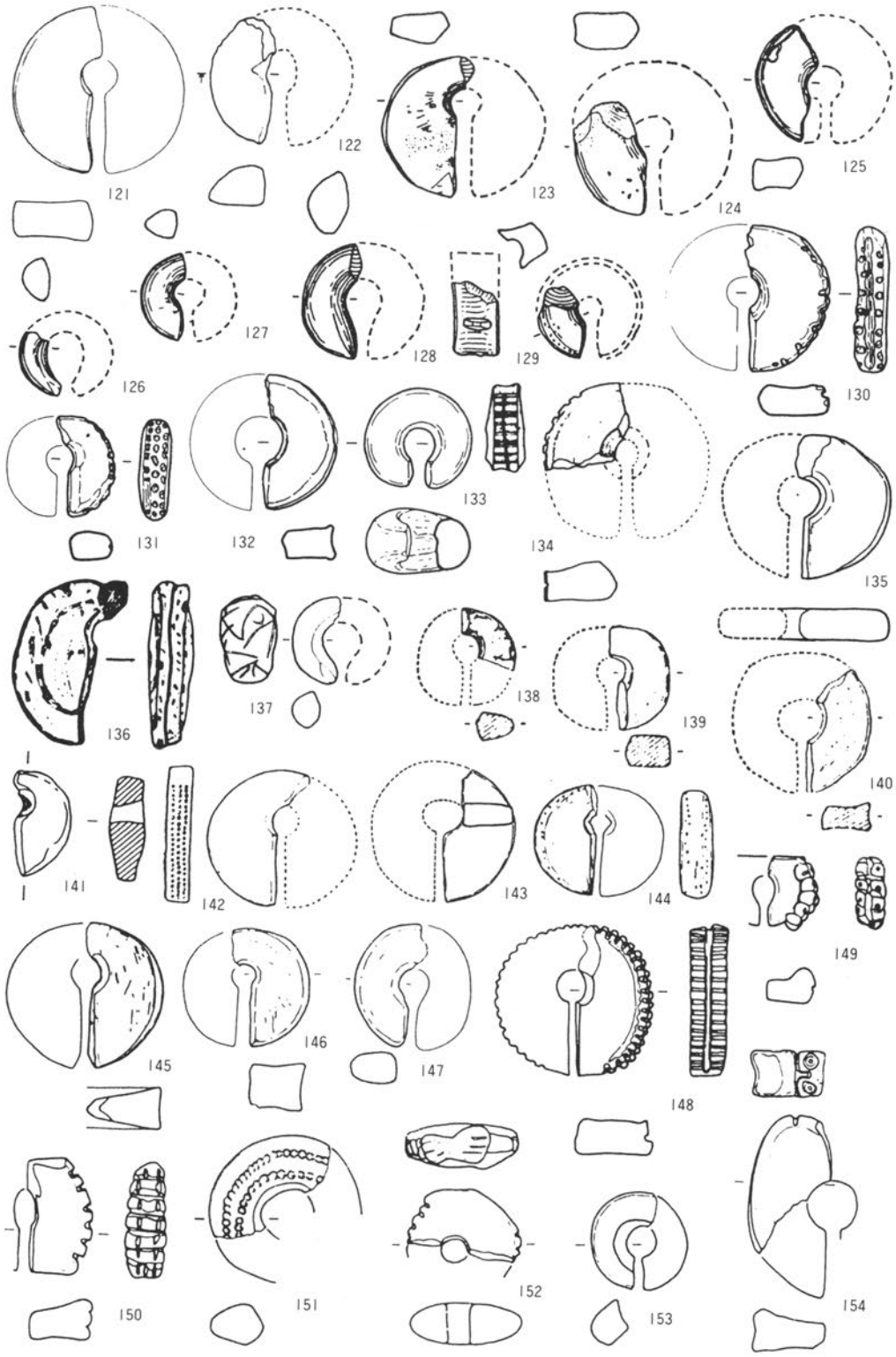


第２図　土製玦状耳飾集成図２（縮尺1/2）

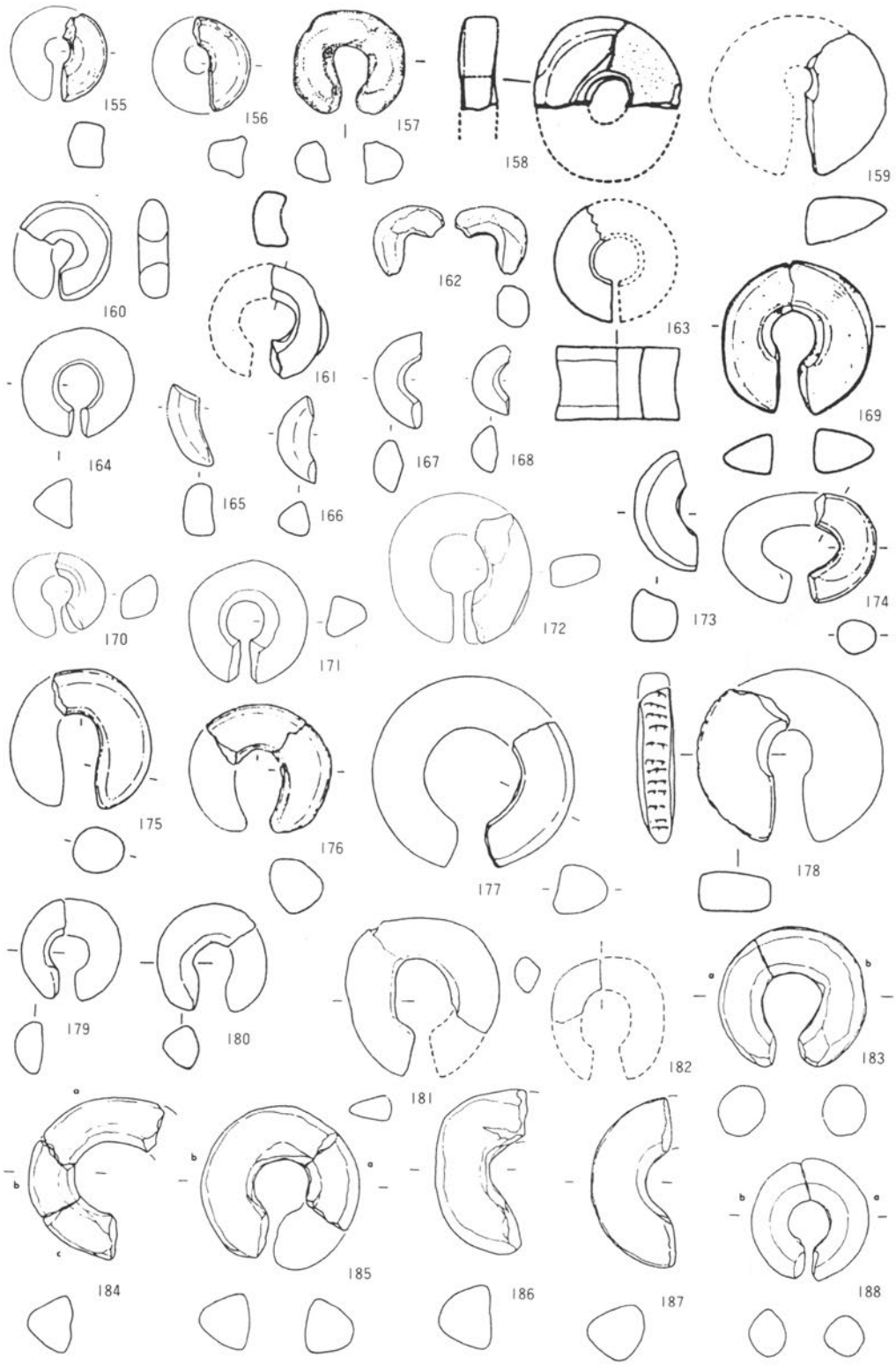


第3図　土製玦状耳飾集成図3（縮尺1/2）

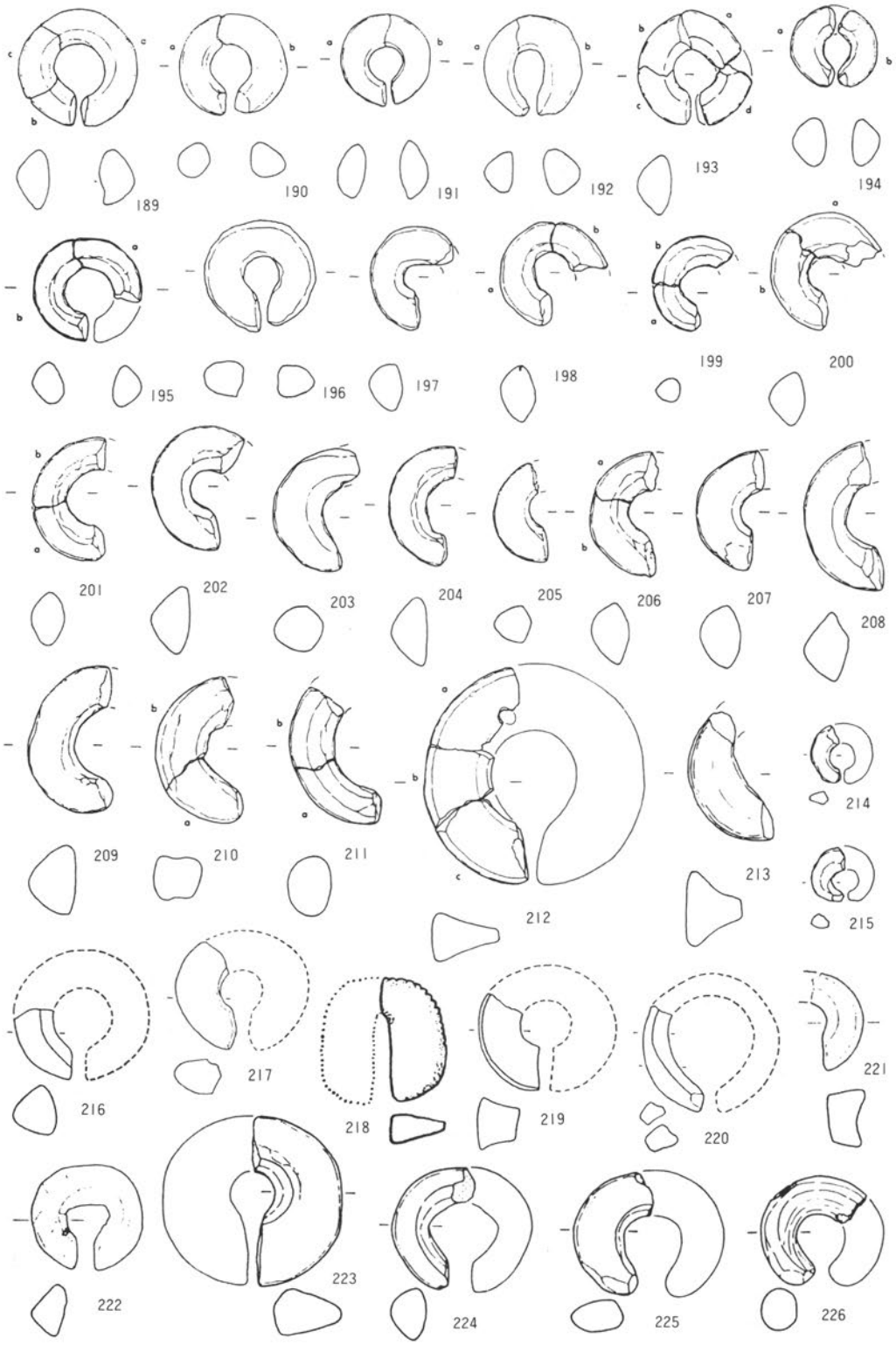
第4図　土製玦状耳飾集成図4（縮尺1/2）



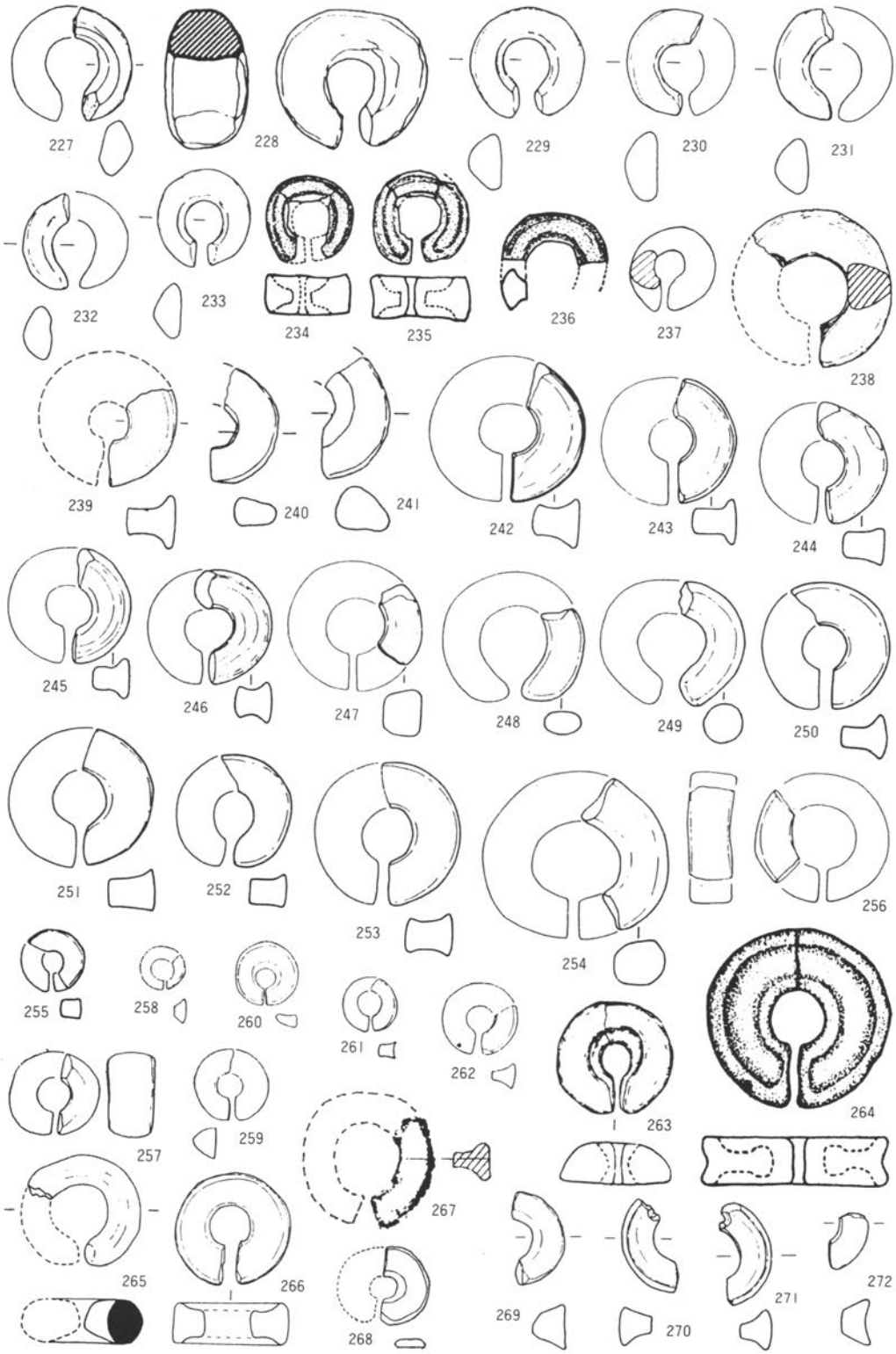
第５図　土製玦状耳飾集成図５（縮尺1/2）



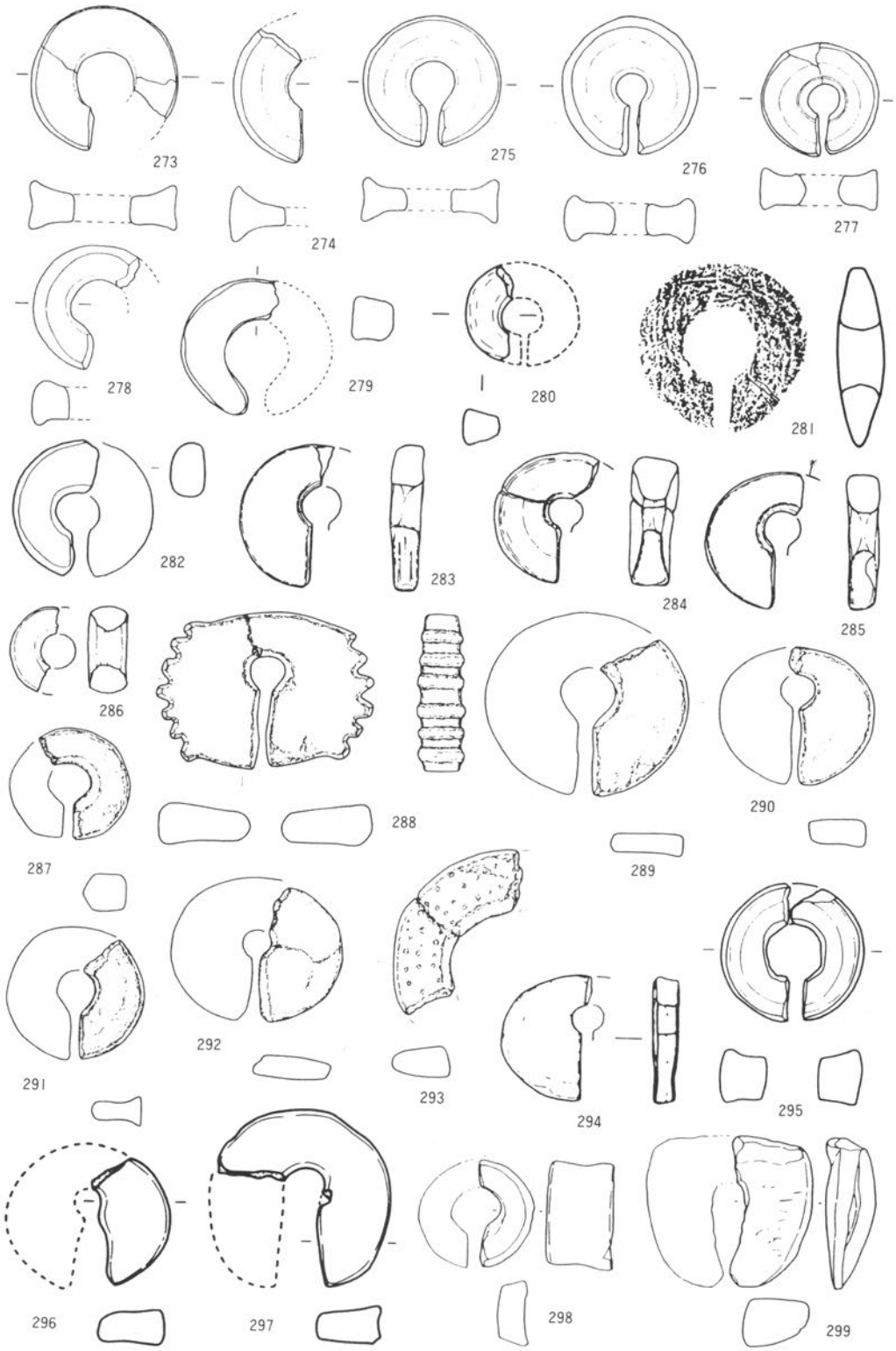
第6図　土製玦状耳飾集成図6（縮尺1/2）



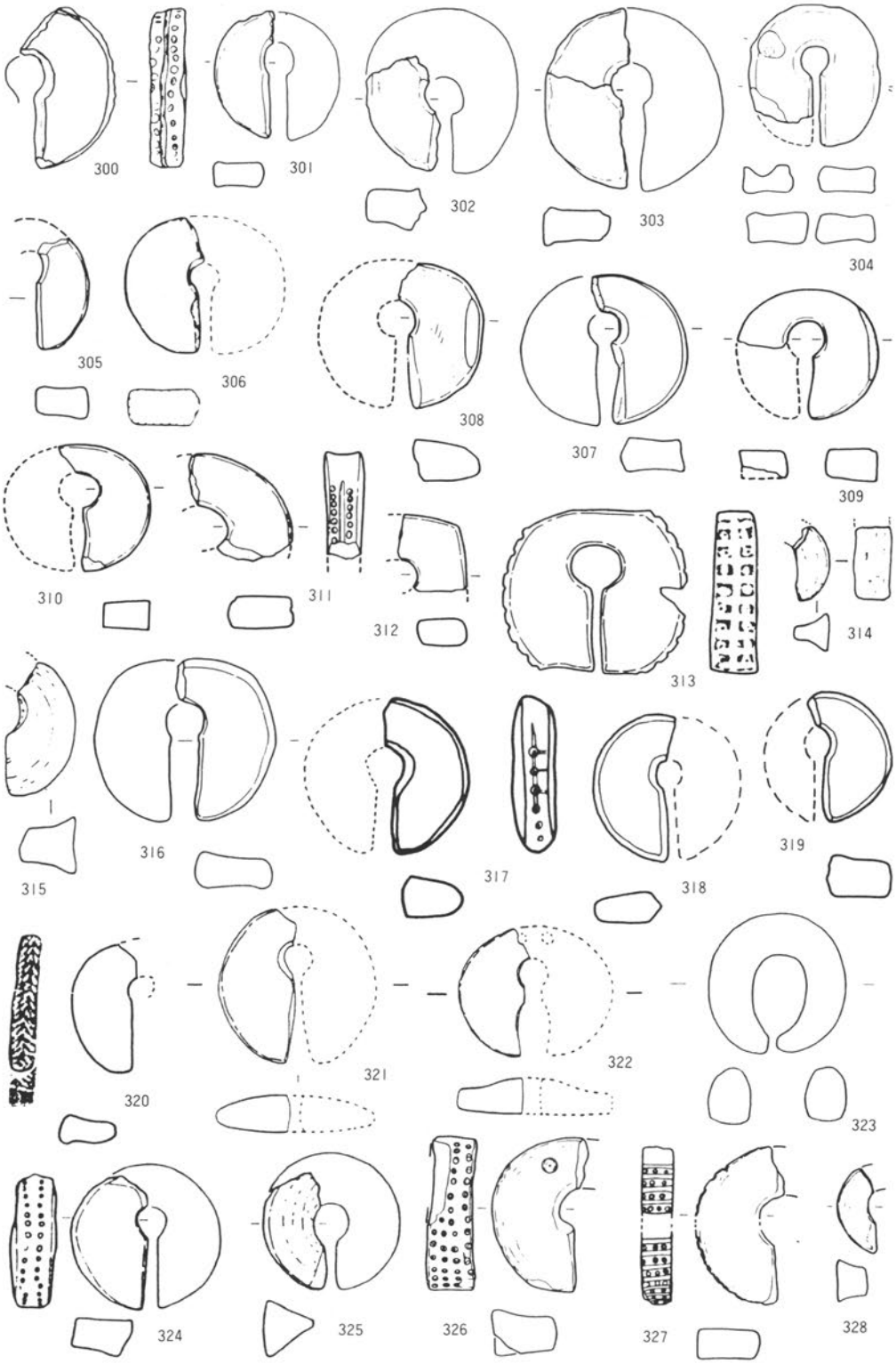
第7図　土製玦状耳飾集成図7（縮尺1/2）



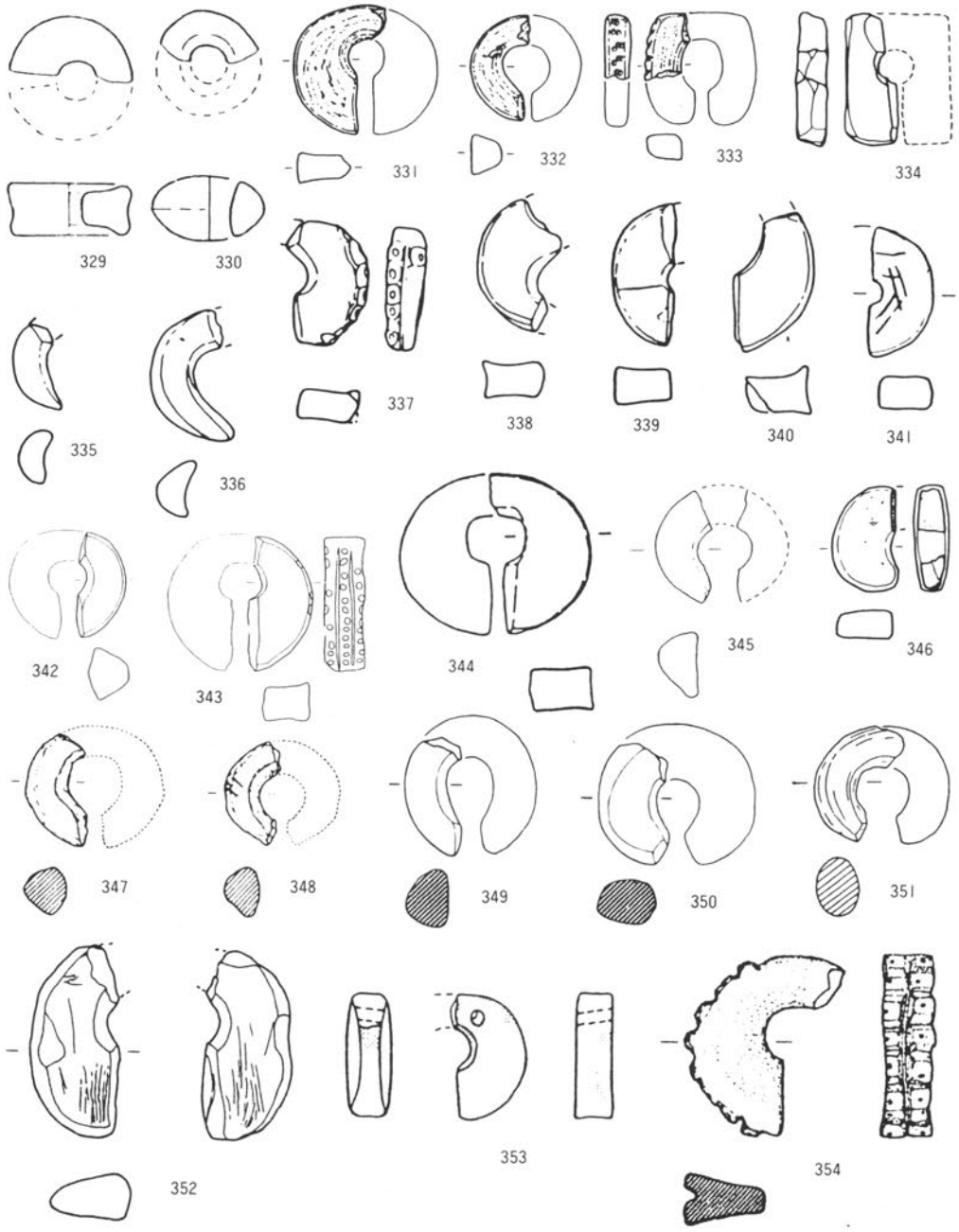
第８図　土製玦状耳飾集成図８（縮尺1/2、258～262・268は不明）



第９図　土製玦状耳飾集成図 追加１（縮尺1/2）



第10図　土製玦状耳飾集成図 追加２（縮尺1/2）



第11図　土製玦状耳飾集成図 追加３（縮尺1/2）

第12図　土製玦状耳飾出土遺跡分布図１

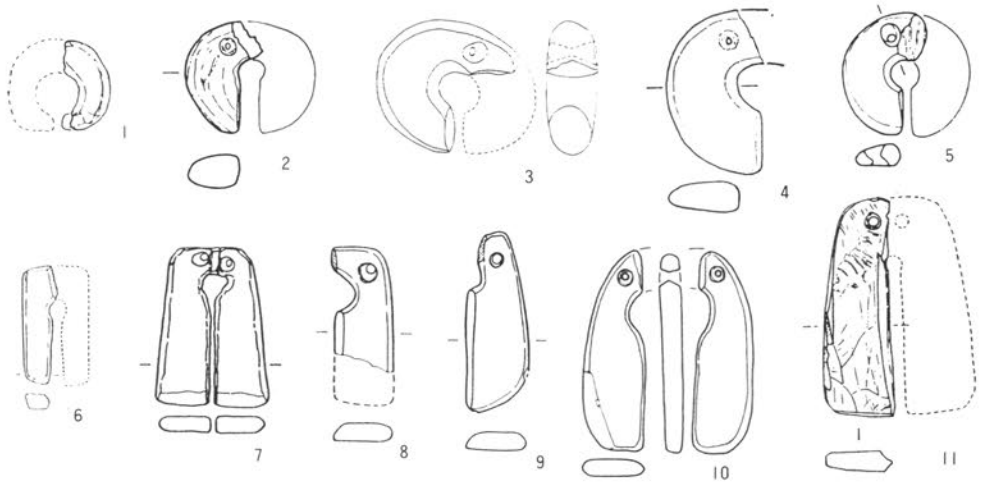
第13図　土製玦状耳飾出土遺跡分布図２

(7) 土製玦状耳飾の動態と石製玦状耳飾との関係

前項で各形態ごとの時期と分布について検討した。その結果、Ⅰ型からⅢ型については基本的に設楽氏の理解を越える結論は得られなかったが、新たに明らかになった点もいくつかある。以下、時間的変遷の中で各形態の動向を概観し、さらに石製玦状耳飾との関係について考えることとしたい。

土製玦状耳飾の最古段階はいまだ明らかではない。群馬県芳賀東部団地例は、その出土状況から諸磯ａ式期の可能性があり、今のところ最古らしい。また、同じⅤ型の富山県小竹貝塚例も諸磯ｂ式期よりやや古い可能性がある。群馬県方面には他に２点の出土事例があり、富山県方面にはその後の追加資料はないらしい。したがって、両地域とも以後土製玦状耳飾が盛行する傾向は認められず、また他地域に影響を与えたとは考えられない。

次の諸磯ｂ式段階になると多摩地域・山梨・長野県でIII型やＶ型が、東関東ではII型が使用され、その後半期には特に多摩地域と千葉・茨城南部で盛んに着用された。多摩地域ではほとんどがIII型で形態的変化に乏しいが、千葉・茨城南部で盛行するII型は様々な形態を持ち紋様も施され、かつＶ型・VI型も共伴して多様な展開を示しており、両地域はその使用面で対照的である。両地域とも発生の経過は不明であるが、他の地域からの影響は考えられず、軌を一にして盛行する。また、千葉西部にはIII型がかなり多く出土しており、II型とIII型の折衷型が多摩・千葉西部の両地域にあって、何らかの交流があったことを想定させている。III型はその後中期初頭までわずかながら使用されるが、II型は興津式期か前期末で姿を消すらしい。なお、III型に最も近い石製玦状耳飾は、早期末から前期中葉に多い[21]が、以降にも古い形態が残る傾向が認められる。埼玉県ゴシン遺跡例（第14図１）はその一例で、金環状をなすが諸磯ｂ式新段階の住居跡から出土している。[22]ただ、こうした事例はあるものの、多摩地域の諸磯ｂ式期に伴うと思われる石製玦状耳飾は他型のものもあって(同図2～5)[23]、この地域におけるIII型の画一性は意図的である可能性が高い。また、VI型に近い石製玦状耳飾は、関東でも数例の報告がある。(同図6～9)[24]時期的には前期後葉以降になるらしい。II型に近い中央孔が平面形の中心より上位にある円形の石製玦状耳飾は前期後葉に盛行するとされており、この時期には数種の形態の石製玦状耳飾が流布していたと考えられる。したがって、東関東では石製の各種の形態が積極的に土製の形態に導入されていたことがわかる。



第14図　各種石製玦状耳飾（縮尺1/2）

1:ゴシン遺跡、2:T.N.No.19遺跡、3･4:T.N.No.740遺跡
5:T.N.No.419-420遺跡、6:北宿遺跡、7:金程向原遺跡
8･9:綱原屋敷跡遺跡、10:宵宮西遺跡、11:下堤Ａ遺跡

十三菩提式期になるとⅣ型が現れる。Ⅳ型の祖型はなお今後の検討が必要であるが、石製に類似型はなく、前段階のⅡ型・Ⅲ型に求めざるをえない。Ⅳ型は十三菩提式期以降中期初頭にかけて関東西部・山梨・長野を中心に福島・山形から石川まで広く分布する。Ⅳ型が示すこの広域分布は、おそらく同時期の土器の動向と密接に関連しており、今後当該期の土器研究と併せて理解する必要があろう。Ⅳ型は釈迦堂を中心に山梨で盛行し、新道式段階まで残ると思われるが、この段階を最後に土製玦状耳飾は姿を消すようである。[25]一方、東北地方ではⅣ型の出現とほぼ同時に、Ⅰ型が現れる。Ⅰ型の出現はこれまで唐突の観を否めなかったが、同時性からⅣ型の影響が関係するらしい。Ⅰ型に類似する石製玦状耳飾は、長い切れ目を持ち下縁が丸みを持つもの（第14図10）[26]や縦長長方形のもの（同図11）[27]がある。今後の検討を要するがⅠ型はさらに細分しうる可能性もある。ただ、Ⅰ型の出土量は多くなく、盛行する状況は見受けられない。

以上のように、時期と地域を異にして現れる土製玦状耳飾は多様な展開を示しており、大きく見てまれな使用で盛行にいたらないケースと大量に製作・使用されるケースの両様があって、かつて言われた土製は石製のバラエティーとする単一的な理解では、こうした様相を解釈することができない。両様の事態は、当然製作・使用の目的が異なっていたことを示すと考えられる。前者の場合は石製玦状耳飾の補完的役割にすぎず、一時的代用品程度としての機能しか想定しえない。では、後者の特に諸磯ｂ式期における盛行の事態は、どのように理解したらよいであろうか。

石製玦状耳飾の場合、茨城・栃木を除く関東各都県の出土遺跡数・出土量は、早期末から中期を含め筆者の大雑把な集成によれば、10から20数遺跡、20から30点前後であり、千葉県では48遺跡63点以上が出土している。[28]諸磯ｂ式期に限れば遺跡数・出土量はさらに限定され、これらが稀少な製品であったことは疑いない。しかし、一方で各都県でほぼ万遍なく出土するのもまた事実である。石製玦状耳飾の製作地は今までの研究で明らかなように、原石産地及びその周辺であり、関東で製作された証拠はほとんどない。したがって、消費地である関東域での普遍的な分布は、製作地との距離に関わりのない供給システムの存在を予想させるとともに、その稀少性と集団墓における出土状況から、石製玦状耳飾は限定された者の着装と考えざるをえない。一方、土製玦状耳飾は土器と同じく粘土さえあれば製作可能であり、すでに述べたように形態による分布の相違から、製作者と使用者は同じか少なくとも同一地域であると思われ、石製玦状耳飾の供給システムと別個の展開を示す。石製玦状耳飾との圧倒的量差と併せ、土製玦状耳飾は独自の機能を果たしていたと考えられるのである。

4．土製玦状耳飾からみた南関東地方前期後半期の社会（素描）

(1) II・III型土製玦状耳飾と当該期土器との関係

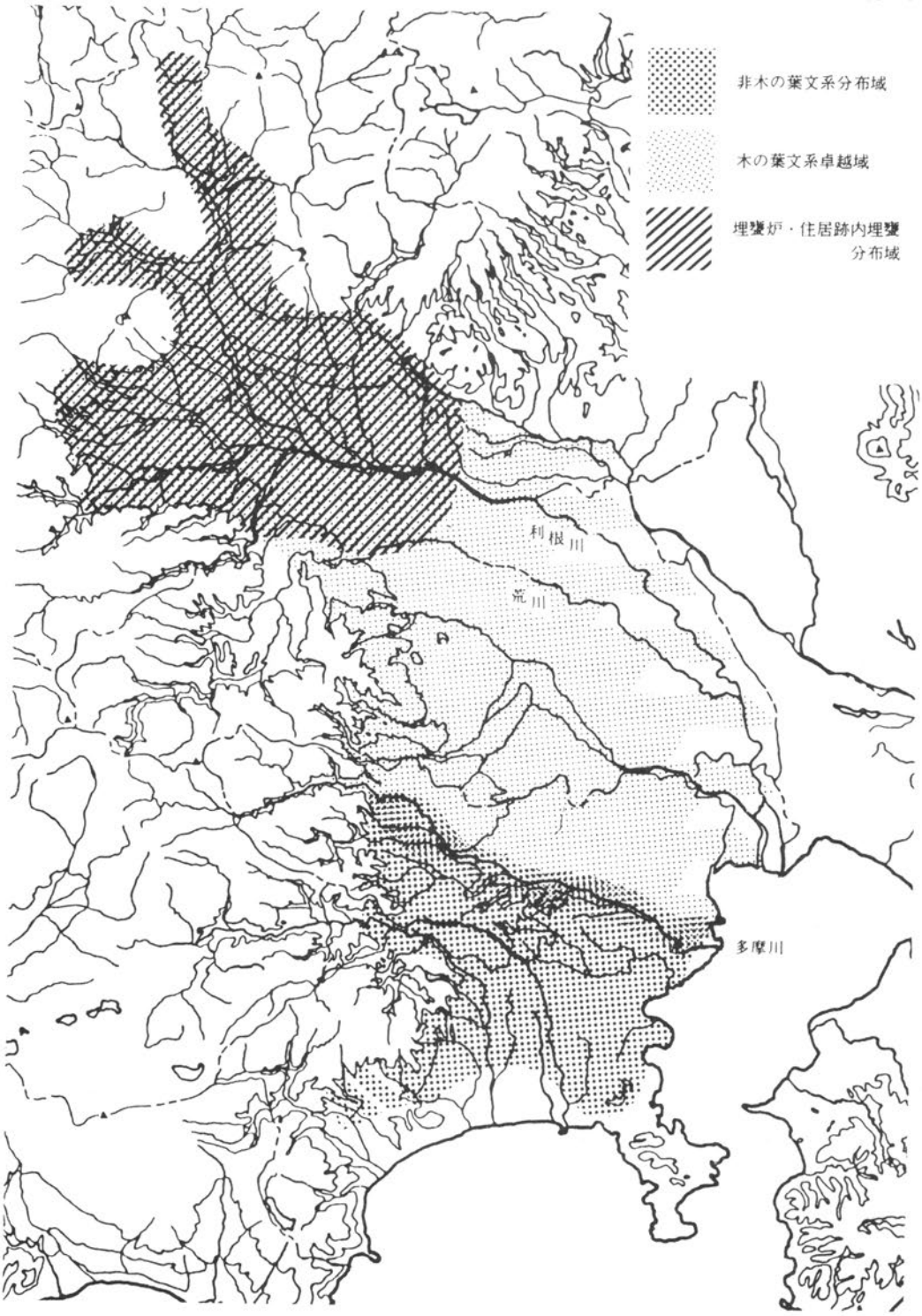
今までみてきたII・III型土製玦状耳飾の南関東地方でのあり方から、どのようなことが想定できるであろうか。まず、土器との関連から検討したい。

II型の分布圏はすでに指摘されているように浮島・興津式土器の分布圏と一致する。浮島式はその型式変遷から独自性が顕著になるのはII式以降である。したがって、II型の盛行は浮島式の型式的独自性の発現と一致する。一方、岩橋陽一氏らによれば、多摩地域の諸磯b式土器は4段階のうち第3段階（中葉後半）からバケツ形・平行沈線紋を特徴とした地域性が顕著となり、関東北西部の木の葉紋系土器とは多摩川を目安として対峙するという。(第15図)[29]こうした多摩地域の土器の状況は、III型の盛行期及び分布域とみごとに一致する。このように、両地域における土製玦状耳飾は、基本的に土器の地域性の顕在化と同じ動態を示すのである。

ところが、中間地帯である千葉西部地域は別の様相を示す。III型及びII・III型の折衷型が多い当該地域における土器の様相は、遺跡によって多少の違いはあるがやはり浮島式が主体である。[30]出土する諸磯b式後半期の土器は浮線紋系のものが多く、岩橋氏らのいう広域分布型の土器である。沈線紋の土器もあるが、これらはやはり岩橋氏らのいうI 3類型が多く、多摩地域固有の土器は小破片の場合、浮島式の平行沈線紋土器と識別が難しいためもあるかもしれないがほとんど見当たらず、千葉東部・茨城南部と基本的に変わらない。したがって、当該地域では土製玦状耳飾と土器の分布のあり方に齟齬が生じていることになる。この事態は、一体何を意味するのであろうか。多摩地域での少量のII型の存在は、この地域での形態規制の強さから交易による受容はありえず、したがって先にみた製作者＝使用者の図式から着装者の流入、すなわち婚入によってもたらされたものと考えられる。一方、千葉西部地域でのIII型の多量の出土は、すべて婚入によるものとは考えられない。隣接する地域集団どうしの婚入の不均衡は一方の集団の存続にかかわることになるから、集団間の婚姻関係の維持は慎重に行われたはずである。この地域の土製玦状耳飾は多様な形態を持つことはすでに指摘した。おそらく、千葉西部地域では婚入によってもたらされたIII型が刺激となって、在地の人々も同型のものやキメラを盛んに製作・着装したのであろう。

(2) 集団表徴説の検討

先にみたように、II・III型の時空分布は、基本的に浮島式及び非木の葉紋系諸磯b式のそれと一致するから、II・III型が結果的に各々の土器を使用した集団を表徴するものであったのは確かであろう。また、多摩地域にあっては少量ではあるが、II型及びII・III型のキメラが存在



第15図　木の葉紋系・非木の葉紋系土器分布域
（岩橋他1992から転載）

する。当該地域のII型が婚入によってもたらされたものとすれば、III型の規制のきわめて強いこの地域では、キメラはII型の使用者自身か非常に近い関係の人によって製作・使用されたと考えられる。この点、春成氏のいわれる装身具の型式差＝出自の違いは、正しいようにみえる。しかし、千葉西部地域では多様な形態が使用され、型式差＝出自の違いが厳格に意識されていたとは思われない。隣接する両地域集団の社会構造は極端に違っていたとは考えられないから、両地域における土製玦状耳飾の異型式のあり方の違いは、規制の強弱の相違にすぎないのであろう。その規制とは石製玦状耳飾着装者の土製玦状耳飾着装者に対するそれであったと思われる。

おそらく、土製玦状耳飾の型式差はある程度は結果的に集団を表徴するものであったとしても、人の移動や情報の流入によって急速に変貌してしまう場合があるのであろう。いずれにしろ、土製玦状耳飾のあり方をはじめとして、この時期の広域分布型土器の存在、石製玦状耳飾の供給システムの存在、千葉方面では不可欠の石器石材の交易路の確保などからみれば、基本的にこの時代の社会は相互依存型の社会であって、強力な出自意識・差別意識や集団間の緊張関係の存在は想定しがたいのである。

なお、小野氏は釈迦堂塚越北A地区の土製玦状耳飾の優位と三口神平地区の耳栓の優位から、各々が集落間の表徴として機能した可能性を指摘している。しかし、註25でみたように両者の時期はわずかにずれており、やはり無理があろう。

(3) 着装者の想定

石製玦状耳飾の着装者については、限定された人々の可能性が大きい。おそらく、シャーマンや集団・集落内の指導者的役割を担った人が着装したのではなかろうか。一方、II・III型土製玦状耳飾の着装者はその出土量の多さと、III型の形態的規制から石製玦状耳飾の着装者とは異なり、一般の集落構成員であったと思われる。さらに、両地域における異型式の存在が先に想定したように本来婚入によってもたらされたものであるならば、春成氏のいう婚姻時における集団の財産継承をともなった着装は理解しえない。土製玦状耳飾が氏のいうような意味で付与されたものとすれば、先述した異型式の存在やキメラの出現はありえないであろう。装身具はもともと着装者の護身の道具であり[31]、土製玦状耳飾は着装者が成長した集団内において、通過儀礼の一つとして与えられたものと考える。

土製玦状耳飾を着装した人骨の発見例はまだない。唯一の石製玦状耳飾の着装人骨が見つかった国府遺跡では、着装者はすべて女性であったといわれている。また、西口陽一氏によれば、中国で最も古い江南の玦状耳飾（C14年代でB.P.6,000年～4,000年）も児童から中年の女性であるという。[32]出土事例は少ないが、石製玦状耳飾の着装者が女性であったとすれば、土製玦

状耳飾の着装者もまた女性であった可能性は高い。今仮にこの前提に立てば、前期後半期においては多摩地域と千葉西部地域は、頻繁ではないが相互に女性の嫁入りによる婚姻関係が成立していたことになろう。このことは、両地域の婚姻体制が妻方居住婚ではなく、夫方居住婚か選択居住婚の社会であったことを示すものと思われる。

5．結　び

土製玦状耳飾という一種の装身具の分析と土器との比較から、諸磯b式期における南関東の社会体制まで論及した。ここでは、群馬・埼玉方面との関係をはじめ資料的限界から触れ得なかった部分、推論に基づく部分も多くあった。近年、民族学的視点に基づく縄紋時代論が隆盛を誇っている一方で、考古学的手法による地道な社会分析論はきわめて少ない。それは土器分析と同様に上記してきたごとく、膨大な資料の収集と分析、いくつかの仮定に立脚した解釈が必要となるからである。本論は一つの装身具のみに基づく初歩的な分析である。御批判賜れば幸いである。最後に、岡本東三、戸田哲也、安斎正人、柳澤清一、木下哲夫、小林克、武藤康弘、高柳圭一の各氏に有益な御教示を賜った。また、中束耕志、岩崎義信、金丸誠、日暮晃一の各氏から文献の提供をいただき、当センターの図書室司書安宅仁志氏には文献収集に御協力いただいた。厚く御礼申し上げる。

註

(1) 拙著　1973「土製玦状耳飾」『古和田台遺跡』船橋市教育委員会

(2) 伊勢田進　1951「新発見の土製玦状耳飾について」『上代文化20』

(3) 沢四郎　1959「大珠と土製玦状耳飾の新例」『考古学雑誌45-1』

(4) 西村正衛　1960「利根川下流域における縄文中期の地域的研究（予報）」『古代34』早稲田大学考古学会

(5) 西村正衛　1964「縄文文化地域研究の基礎的概念」『学術研究13』早稲田大学教育学部

(6) 西村正衛　1984「Ⅴ文化統合と変動の考察」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部

(7) 高山純　1965「縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一考察」『人類学雑誌73-4』

(8) 小林達雄　1967「縄文晩期における＜土版・岩版＞研究の前提」『物質文化10』

(9) 中村貞史　1968「№88Ｂ遺跡(3)玦状耳飾」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅴ』多摩ニュータウン遺跡調査会

(10) 藤田富士夫　1971「耳栓の起源について－飾玉の在り方と関連して－」『信濃23-4』

(11) 藤田富士夫　1975「玦状耳飾の素材の在り方について」『信濃27-9』

(12) 春成秀爾　1983「装身の歴史　採取の時代」『季刊考古学５』雄山閣出版

(13) 春成秀爾　1982「縄文社会論」『縄文文化の研究８』雄山閣出版

なお、この中で氏は縄紋前期を妻方居住婚の社会としており、註12において修正した。

(14) 設楽博己　1985「土製玦状耳飾について」『西の台（第２次）－船橋市西の台遺跡発掘調査報告書－』船橋市遺跡調査会

(15) 小野正文　1989「山梨県に於ける土製耳飾の予見的考察」『山梨考古学論集II』山梨県考古学協会

(16) 桑原護　1993・1994「房総における玦状耳飾について(1)・(2)」『流山市史研究10・11』流山市教育委員会

氏の緻密な集成に敬意を表したい。他県の集成にはなお多くの遺漏があるはずである。御教示いただければ幸いである。

(17) 山内清男　1964　「縄文式土器・総論　Ｖ文様帯系統論［注２］」『日本原始美術１』講談社

(18) 栃木県上欠遺跡では、加曽利Ｅ４式期と思われる38号住居跡からII型B'の断面を持つ例が出土しているが、土壙内でありこれも確実とはいえない。（第11図353）

(19) 塚本師也　1988「第５節　土製玦状耳飾りについて」『鹿島脇遺跡』栃木県教育委員会

(20) 前掲藤田(1971)に同じ

(21) 形態変遷については、以下の論文がある。近年各部位の比率によって編年を行おうとする傾向が見られるが、細部の比率を比べても早期末の出現期から中期まで４～５段階程度の区分と、おおよその変遷過程が示されるにとどまり、西口分類を越えていない。このことは、数値化による形態分類が必ずしも有効でないことを示している。したがって、土製玦状耳飾の分類もここでは比率によらなかった。

西口陽一　1983「装身と原始・古代社会－耳飾からみた性別」『季刊考古学５』雄山閣出版

藤田富士夫　1983「玦状耳飾の編年に関する一試論－特に北陸及びその周辺を中心として－」『北陸の考古学－石川考古学研究会々誌26』

堀江武史　1992「玦状耳飾の分類と製作工具に関して」『國學院大学考古学資料館紀要８』

(22) 埼玉県遺跡調査会　1978『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡』

(23) (財)東京都埋蔵文化財センター　1982「№19遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和56年度－(第６分冊)』

(財)東京都埋蔵文化財センター　1983「№740遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和57年度-(第５分冊)』

(財)東京都埋蔵文化財センター　1984「№740遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和58年度-(第７分冊)』

(財)東京都埋蔵文化財センター　1983「№419・420遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和57年度－(第２分冊)』

(24) 浦和市遺跡調査会　1983「北宿遺跡発掘調査報告書」『浦和市遺跡調査会報告書第26集』

日本大学文理学部史学研究室　1986『金程向原遺跡Ｉ－第Ｉ地点・第II地点発掘調査報告』

(財)千葉県文化財センター　1991「綱原屋敷跡遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI』

(25) 小野氏の中期前半における土製玦状耳飾と土製耳飾の同時期併存と両者の融合形が存在するとの指摘は、なお検討の余地があるように思われる。氏が両者の融合形とした上の平のIII類Ｄ１玦状耳飾(第８図258及び262?)は、筆者のいうIV型で他の遺跡にも同型のものがあり、いわゆる滑車形耳飾（IV類ａ種）とは形態的にも異なる。また、氏は山梨県笠木地蔵例（第８図256)を中期（井戸尻式）とし、土製耳飾の前期例として花鳥山・上の平・平出・唐沢例をあげ、両者がある時期幅で併存したとしている。笠木地蔵例は井戸尻式が少量出土しているだけで、確実な共伴とは言いがたい。また、平出の土製耳飾は報告ではＰトレンチ西部出土とされ、同地区から諸磯式少量があったとされているが、そこには曽利式期の２軒の住居跡があり、前期とするには確実ではない。上の平例は氏の一覧表からも明らかなように藤内期の住居跡出土を除き、他の３例は時期が確定できない。花鳥山例は前期と思われるがその形態は縦長で、むしろ藤田氏のいう「体部凹状管玉状品」に近い。残る唐沢例のみが前期を主体とした土器と出土しており、その可能性が指摘されるにすぎない。両者が時期的に

重なりそうなのは、新道段階である。前述した釈迦堂S－3区SB95からは両者がともに出土しており、同じく新道段階の神谷原SB109からは上下非対称の耳栓が出土している。

耳栓については、藤田氏や小野氏が指摘されるとおり、土製玦状耳飾とは系統が別と思われる。藤田氏の「体部凹状管玉状品」が形態的に最も近いが、耳栓の確実な最古例は新道段階であり、石製体部凹状管玉状品はいまだ前期を下る例はないらしい。

中期段階での土製玦状耳飾と耳栓の同時期併存の問題及び石製を含めた玦状耳飾と耳栓との関係については、なお今後の課題とすべきであろう。

(26) 福島県会津高田町教育委員会　1984『胄宮西遺跡』

(27) 藤田富士夫　1983「玦状耳飾」『縄文文化の研究7　道具と技術』雄山閣出版
秋田市教育委員会　1976「下堤遺跡A地区」『小阿地　下堤遺跡坂ノ上遺跡発掘調査報告書』

(28) (財)千葉県文化財センター　1992「千葉県文化財センター研究紀要13－生産遺跡の研究2－玉」P.108

(29) 岩橋陽一・江里口省三・可児通宏・小坂井孝修・中西充　1992「諸磯b式土器の展開とその様相」『東京都埋蔵文化財センター研究論集XI』

(30) 今、当該域の各遺跡における両型式の出土量の比較をする余裕はないが、四街道市和良比遺跡では浮島式系約2万点に対し、諸磯系は約3千点という。

(31) 金関丈夫　1982「魂の色－まが玉の起り」『考古と古代』法政大学出版局

(32) 前掲西口(1983)に同じ

土製玦状耳飾集成図表掲載文献一覧　(冒頭番号は集成表の遺跡No.と同じ)

1-1　秋田市教育委員会　1982『秋田市下堤D遺跡発掘調査報告書』

1-2　秋田市教育委員会　1983『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

2-1　山形県教育委員会　1988『吹浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書』

2-2　山形県教育委員会　1986『大壇B・C遺跡発掘調査報告書』

3-1　宮城県教育委員会　1969「埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－」『宮城県文化財調査報告書19』

3-2　宮城県南方町　1975『宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告』

4-1　福島大学考古学研究会　1971「浦尻貝塚」『福島大学考古学研究会発掘調査報告書1』

4-2　高山純　1965「縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一考察」『人類学雑誌73-4』

4-3　(財)福島県文化センター　1983「薬師堂遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告13』

5-1　栃木県教育委員会　1988「鹿島脇遺跡」『栃木県埋蔵文化財報告93』

5-2　沢四郎　1959「大珠と土製玦状耳飾の新例」『考古学雑誌45-1』

5-3　渡辺竜瑞　1954「栃木県那須郡伊王野木下遺跡調査概報」『白桃26』

5-4　栃木県立博物館　1988『第23回企画展　祈りの原像－縄文時代のまつりと道具』

5-5　4-2に同じ

5-6　(財)栃木県文化振興事業団　1985『上欠遺跡－上欠団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査』

5-7　小山市教育委員会　1979「乙女不動原亀田遺跡（B地点）調査報告書」『小山市文化財調査報告書8』

5-8　5-4に同じ

6-1　(財)茨城県教育財団　1990「金木場遺跡」『一般国道6号(日立バイパス)改築工事地内埋蔵文化財発掘調

査報告書』

6-2　(財)茨城県教育財団　1990『一般国道349号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書－北郷C遺跡・森戸遺跡』

6-3　川崎純徳他　1980『遠原貝塚の研究（本編Ⅰ）』勝田文化研究会

6-4　井上義安　1971「シンポジウム茨城県北部における前期縄文文化」『那珂川の先史遺跡4』那珂川の先史遺跡刊行会

6-5　(財)茨城県教育財団　1990『茨城県立総合教育研修センター（仮称）建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－石山神遺跡』

6-6　木滝国神遺跡調査団　1988「北台遺跡発掘調査報告書」『鹿島町の文化財第60集』

6-7　(財)茨城県教育財団　1982「外山遺跡」『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』

6-8　(財)茨城県教育財団　1987『主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書　境松遺跡』

6-9　西村正衛　1984「茨城県稲敷郡美浦村興津貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部

6-10　4-2に同じ

6-11　西村正衛　1984「茨城県稲敷郡江戸崎町村田貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部

6-12　(財)茨城県教育財団　1984「町田遺跡」『竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書9』

6-13　西村正衛　1984「茨城県北相馬郡取手町向山貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部

7-1　銚子市教育委員会　1974『粟島台遺跡』

7-2　(財)千葉県文化財センター　1992『小見川町天神後遺跡』

7-3　(財)千葉県文化財センター　1992「多田遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』

7-4　(財)千葉県文化財センター　1988「東野遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』

7-5　(財)千葉県文化財センター　1991「毛内遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』

7-6　(財)千葉県文化財センター　1986「新山台遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

7-7　(財)千葉県文化財センター　1981『木の根』

7-8　(財)千葉県文化財センター　1984『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』

7-9　千葉県北総公社　1971『三里塚』

7-10　芝山はにわ博物館　1976『旧久住中南・右田両遺跡調査報告書』

7-11　千葉県北総公社　1975『公津原』

7-12　(財)印旛郡市文化財センター　1987『成田市椎ノ木遺跡発掘調査報告書』

7-13　(財)千葉県文化財センター　1989『成田市林北遺跡・長山遺跡－一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』

7-14　富里町　1992『平成3年度富里町埋蔵文化財発掘調査報告書－塚越遺跡－』

7-15　(財)千葉県文化財センター　1990『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ－成田市木戸下遺跡・富里

町七栄古込遺跡－』
7-16 (財)千葉県文化財センター 1986『酒々井町伊篠白幡遺跡』
7-17 (財)印旛郡市文化財センター 1986「古山遺跡」『印旛村村道瀬戸師戸線発掘調査報告書』
7-18 房総考古資料刊行会 1973「榎峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II』
7-19 房総考古資料刊行会 1974「高根北遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IV』
7-20 (財)千葉県文化財センター 1989「鹿黒遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IX』
7-21 (財)千葉県文化財センター 1991『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X』
7-22 (財)千葉県文化財センター 1982『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VII』
7-23 (財)千葉県文化財センター 1984「谷田木曽地遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VIII』
7-24 房総考古資料刊行会 1973「一本桜遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II』
(財)千葉県文化財センター 1976「一本桜遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書V』
7-25 (財)印旛郡市文化財センター 1988「神々廻宮前遺跡B地点」『船橋カントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書－神々廻遺跡群－』
7-26 (財)印旛郡市文化財センター 1991『松戸市営白井聖地公園埋蔵文化財発掘調査報告書－向台II遺跡』
7-27 (財)千葉県文化財センター 1989『佐倉市向原遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書VI－』
7-28 (財)千葉県文化財センター 1987『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書IV－』
7-29 7-28に同じ
7-30 四街道市吉岡遺跡群調査会 1986「軽沢遺跡」『四街道市吉岡遺跡群発掘調査報告書』
7-31 四街道市吉岡遺跡群調査会 1986「金住院遺跡」『四街道市吉岡遺跡群発掘調査報告書』
7-32 (財)印旛郡市文化財センター 1991『和良比遺跡発掘調査報告書II』
7-33 (財)千葉県文化財センター 1991『四街道市内黒田遺跡群』
7-34 (財)印旛郡市文化財センター 1987「東原遺跡」『四街道市四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書』
7-35 (財)市原市文化財センター 1990『市原市北旭台遺跡』
7-36 (財)君津郡市文化財センター 1987『千葉県袖ケ浦町西萩原遺跡』
7-37 (財)千葉県文化財センター 1986『千葉市辺田山谷遺跡－千葉県小児医療センター（仮称）建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』
7-38 (財)千葉市文化財調査協会 1989『千葉市辰ケ台・住吉・東住吉遺跡－昭和の森遺跡群昭和60・61年度調査報告書』
7-39 (財)千葉県文化財センター 1993『千葉東南部ニュータウン18－鎌取遺跡－』
7-40 (財)千葉県都市公社 1973「星久喜遺跡」『京葉－京葉道路第四期一般国道16号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
7-41 (財)千葉市文化財調査協会 1991『神門遺跡』
(財)千葉県文化財センター 1988『千葉市浜野川遺跡群（低湿地における遺跡確認調査）』
7-42 千葉市教育委員会 1990『埋蔵文化財調査（原町遺跡群）報告書－昭和63・平成元年度－』
7-43 (財)千葉市文化財調査協会 1990『千葉市古山遺跡』

7-44　庄司克他　1981「昭和45･46年度加曽利貝塚東斜面遺跡限界確認調査概報」『貝塚博物館紀要６』千葉市加曽利貝塚博物館
7-45　山武考古学研究所　1985『エゴタ遺跡－北地区－調査報告』
7-46　(財)千葉市文化財調査協会　1987『千葉市子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡』
7-47　(財)千葉県文化財センター　1986「五味ノ木遺跡」『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
7-48　(財)千葉県文化財センター　1983『千葉市谷津台貝塚』
7-49　7-46に同じ
7-50　(財)千葉市文化財調査協会　1989『千葉市高台向遺跡』
7-51　古和田台遺跡調査団　1973『古和田台遺跡』
7-52　山武考古学研究所　1983『西ノ台遺跡調査報告』
船橋市遺跡調査会　1985『西の台（第２次）－船橋市西の台遺跡発掘調査報告書－』
7-53　(財)千葉県都市公社　1975『飯山満東遺跡』
7-54　船橋市教育委員会　1991『小室上台遺跡』
7-55　船橋市教育委員会　1983『下郷後』
7-56　下津谷達男他　1967「佐津間山王台遺跡・軽井沢遠山遺跡」『鎌ケ谷町史資料集４』
7-57　(財)千葉県文化財センター　1989「五本松遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IX』
7-58　杉原荘介他　1971『市川市史１』市川市史編纂委員会
7-59　市川市教育委員会　1991『平成２年度市川市内遺跡群発掘調査報告』
7-60　市川市教育委員会　1981『今島田東遺跡発掘調査報告』
7-61　宮下和子　1974「縄文時代の耳飾」『かみしき12』下総史料館
7-62　松戸市出来山遺跡調査会　1985『千葉県松戸市出来山遺跡』
7-63　(財)千葉県文化財センター　1982「館林遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
7-64　(財)千葉県文化財センター　1982「水砂遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
7-65　(財)千葉県文化財センター　1986「聖人塚遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV』
7-66　(財)千葉県文化財センター　1986「中山新田Ⅰ遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV』
7-67　(財)千葉県文化財センター　1985「矢船遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書III』
7-68　柏市教育委員会　1992『駒込遺跡』
7-69　流山市教育委員会　1988『こうのす台第IV遺跡Ｂ地点』
7-70　流山市教育委員会　1990「Ⅰ小屋明神脇遺跡」『流山市市内遺跡群発掘調査報告書』
7-71　(財)千葉県文化財センター　1986「上貝塚」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
7-72　中野久木遺跡調査団　1974『流山市中野久木遺跡調査報告書』
7-73　関宿町教育委員会　1982『下根遺跡』
8-1　前橋市教育委員会　1990『芳賀東部団地遺跡III』
8-2　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985『清水山遺跡』
8-3　群馬県昭和村教育委員会　1985『中棚遺跡』
9-1　浦和市遺跡調査会　1982「和田遺跡」『浦和市東部遺跡群発掘調査報告書２』
9-2　埼玉県教育委員会　1973「坂東山」『埼玉県遺跡発掘調査報告書２』

10-1 稲荷丸北遺跡調査団 1983『稲荷丸北遺跡』ニュー・サイエンス社
10-2 (財)東京都埋蔵文化財センター 1987「No.5遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和60年度(第2分冊)』
10-3 三輪南地区遺跡群発掘調査会 1989『東京都町田市三輪南遺跡群発掘調査報告書』
10-4 町田市小田急野津田・金井団地内遺跡調査会 1987『町田市金井原遺跡群Ⅰ』
10-5 藤の台遺跡調査会 1980『藤の台遺跡Ⅲ』
10-6 小山田遺跡調査会 1983『東京都町田市小山田遺跡群Ⅱ』
10-7 小山田遺跡調査会 1984『東京都町田市小山田遺跡群Ⅳ』
10-8 小山田遺跡調査会 1984『東京都町田市小山田遺跡群Ⅴ』
10-9 鶴川第二地区遺跡調査会 1991『東京都町田市真光寺・広袴遺跡群Ⅵ』
10-10 多摩ニュータウン遺跡調査会 1968「No.120遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅴ』
10-11 多摩ニュータウン遺跡調査会 1968「No.121遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅴ』
10-12 多摩ニュータウン遺跡調査会 1967「No.25遺跡の調査」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ』
10-13 多摩ニュータウン遺跡調査会 1968「No.88B遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅴ』
10-14 (財)東京都埋蔵文化財センター 1984「No.740遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和58年度(第7分冊)』
10-15 (財)東京都埋蔵文化財センター 1983「No.419・420遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和57年度(第2分冊)』
10-16 (財)東京都埋蔵文化財センター 1990「No.174遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和63年度(第2分冊)』
10-17 (財)東京都埋蔵文化財センター 1989『資料目録4』P.29
10-18 多摩ニュータウン遺跡調査会 1970「No.175遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査概報』
10-19 多摩ニュータウン遺跡調査会 1980「No.551遺跡調査概報」『多摩ニュータウン遺跡調査概報－昭和54年度－』
10-20 10-19に同じ
10-21 10-19に同じ
10-22 (財)東京都埋蔵文化財センター 1981「No.482遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和55年度(第4分冊)』
10-23 (財)東京都埋蔵文化財センター 1982「No.561遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度(第4分冊)』
10-24 (財)東京都埋蔵文化財センター 1982「No.711遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度(第4分冊)』
10-25 八王子市宇津木台地区遺跡調査会 1989『宇津木台遺跡群XIV』
11-1 野川南台団地埋蔵文化財調査団 1968『野川南台団地埋蔵文化財調査報告－十三菩提遺跡－』
11-2 伊勢田進 1951「新発見の土製玦状耳飾について」『上代文化20』
11-3 武蔵野美術大学考古学研究会 1972『宮の原貝塚』
11-4 赤星直忠・塚田明治 1973「横浜市室ノ木遺跡」『横須賀考古学会研究報告2』
11-5 11-2に同じ
11-6 神奈川県教育委員会 1976「草山遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告11』
12-1 山梨県教育委員会 1989『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』
小野正文 1989「山梨県に於ける土製耳飾の予見的考察」『山梨考古学論集Ⅱ』山梨県考古学協会
12-2 山梨県教育委員会 1986「釈迦堂Ⅰ」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告17』
山梨県教育委員会 1987「釈迦堂Ⅱ」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告21』
12-3 山梨県教育委員会 1985「笠木地蔵遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告12』
12-4 山梨県教育委員会 1984「豆塚遺跡・東新居遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告4』

12-5　小野正文　1989「山梨県に於ける土製耳飾の予見的考察」『山梨考古学論集II』山梨県考古学協会

12-6　12-5に同じ

13-1　武藤雄六　1966「八ケ岳南麓における縄文時代前期末の遺跡」『信濃18-4』

13-2　武藤雄六　1968「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊4-1』

13-3　長野県教育委員会　1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村その５－』

13-4　岡谷市教育委員会　1986『梨久保遺跡第５次～第11次発掘調査報告書』

13-5　中村龍雄　1980『中部高地諸磯Ｃ式比定土器その（二）象徴土器出土遺跡の集録』

13-6　13-3に同じ　P.300註３

14-1　藤田富士夫　1975「玦状耳飾の素材の在り方について」『信濃27-9』

15-1　真脇遺跡発掘調査団　1986『石川県能津町真脇遺跡』

（財団法人千葉県文化財センター調査研究部事業課）